This copy has been provided by the UBC Archives [or UBC Rare Books and Special Collections] and is to be used solely for research or private study.

NAKANO, VJO

FOLDER NO.
6-9

JAPANESE-CANADIAN
COLLECTION

XXV

PLEASE RETAIN
ORIGINAL ORDER

NAKANO, UJO

6-4

Courtesy of Mr. Ujo NAKANO, TORONTO.

二十五周年記念の教会の調査に

30頁へ

Vol. I. 中野雨情手記

「宣誓」歌文集 原稿

第一巻

480

①

戦争とは？ 今更云ふまでもなく、国と国とか個々の意志の争行に関争、互に傷つけ合ひ、破壊し合ふ事である。思へば我々日系人にとって第二次世界大戦は、悪夢のような出来事であった。その悲惨な歴史を克服して、各地に於て戦前よりも勝る地盤を築き、凡ゆる分野に発展を遂げつゝある同胞の涙ぐましい努力を見る時、私の辿って来た茨の道を、メモより抜萃して敢て披見するのも、無意義なことではないと信ずる。

一九四二年三月十六日。

我等一世は遂に道路キャンプへの出發命令を受ける。第二次大戦勃発より将に百日。僕等にとって生涯忘れ得ぬ運命の岐路に立たされた日だ。

顧れば渡加以来開戦まで約二十年間就働していたウッドファイバー・パルプ工場。ここはバンクーバーを去る海路六十哩の海浜、船にのみ交通に通ずる工場就働者のみの寒村。日本人就働者三百余名、うち妻帯者約五十名。婦女子を合して約五百名。日本国語学校も[illegible]により経営。百名近い学童を有し、二名の女教師を採用[illegible]、カナディアンに日本語の普及につとめた。

同地には早くから日本人の就働者を以て慈善団体を組織し、在留日系人の福祉増進。会員相互の親睦を計り、文字通り平和境を築いていた。

多くの一世の中に、旧劇を踊る者多数居て、クリスマス祝賀会の余興は、仲々忠臣蔵など其の他を上演して。祖国の雰囲気を大いに味はひ、在留民一同をこよなくよろこばせた。

NAKANO, VJO

6-9

108

時にパルプ会社の社長ブレナン氏が至って親日家で、日本人社会からの色々な要求は、常に心よく聞き入れて呉れた。我々日本のクリスマス祝賀会には常に列席して、一場の祝辞を述べ、会員一同に暖い握手を賜った。

当地工場には白人も相当数就働していたが、常に日白親善の美が発揮されていた。又日本貨物船が毎月一回往埠頭に横付けされて、パルプの積荷作業が行なわれた。この工場の全生産額のパルプが日本へ輸出されていた

我等の働いている工場の埠頭に、なつかしい祖国の船がこうして毎月入港し、勇ましい日章旗のひるがえるさまを眼のあたり見て、望郷の念をいや加上にも燃え立たせた。

時々、高級船員を我等の会主催の下に招き、懇親会を開いて、互に意見の交換を行ったり、祖国の新しいニュースを聞いたりすると、常に時代に遅れ勝ちな我々の脳裡に新らしいエネルギーを注ぎ込まれる思いがする。同時になつかしい祖国をま近く感じた。

こうした平和な村に或日突然驚くべきニュースが飛来し、在留民の心を震撼させた。③ それは日米開戦の火蓋を切った、パールハーバー爆撃の報であった。

それから間もない或日の夕方、晩市を遠く離れたこの寒村ウッドファイバーに、すさまじい悪ニュースが伝えられて人心が極度に動ようした

「四十才以下の一世は道路キャンプへ送られる」但し、婦女子、二世、四十才以上の一世及び病人は、このまま此処にとどまって居てもよいとの事であった。いつの日我々はウ村を去らせられるか。このことをめぐって、これまでにも何回かデマが飛んだ。こうした事に人間の心理というものがほゞうかがわれる。始めのうちは誰も当てにならなかったが、三月になってから出発の日のことも確実になる。

愈々、三月十六日。我々一世は遂に道路キャンプへの出発命令を受く。

NAKANO, VJO　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　6-4

社会からの
クリスマス
…に喰い掛…
…の美が発…
て、パルプの
プが日本へ
して毎日入港
郷の念をいや
開いて、互に
すると、常
込まれる
、在留民の
ルハーバー
今村ウット（…が移ようした…に）
婦女子、二世、
いとの事で
までには何回かア
われる。始めの
きる。
…令を交く。

3

⑤-⑨⓪

うけ出発までに未だ三週間程の時日があった。一日本の爆撃機が飛来すると云ふので、毎夜燈火管制が行なはれるようになった。（建設させる）出発を間近にして種々のデマが飛んだ。「ロッキー山麓に道路を（造らせるのか）、一歩あやまれば千尋の谷。予想外の酷寒で到底寒さに堪えられない。山奥の不便な所で食料が届かない。」などであった。

それ等のニュースをどこまで信じてよいものか、不安は極度に募って、戦々恐々とした日々がくり返えされた。

しかし政府の命令で如何なすることも出来ず、これも運命と思って悲壮な決意をした。

いよいよ出発の三月十六日は来た。

×　　×

④

初めカナダ政府は、ビーシー州沿岸の日系人中、日本国籍者で、徴兵年令にある男だけを"危険"と見なして防衛地帯から移動、撤退させれば、それでビーシー州の"排日恐日"の空気はしづまるであろうと考え、先づそのワク内の日本人だけを撤退させる発令をしたものだったらしいが、図に乗った排日屋どもは、この時とばかりに好い気になって騒ぎ立てる。カナダ政府も、多年の懸案だったビーシー州の排日問題を解決するには、この機会を逸することは出来ない――と決意したらしいと見られていて、最初の「日本国籍の兵役関係年令の男子」のワクは漸時拡大され、日本国籍たると帰化人ないしはカナダ生れの市民たるとを問わず、男女の別なく遂には全日系人の総立ちのきとなった。

×　　×

⑤

いよいよ（我等一世の）出発の三月十六日は来た。

この日（ロッキー山麓の）道路キャンプへ出発する我等一世を送るために、埠頭は家族や友人（二世達）で埋められ大混雑を呈した。別離の辛さは世の運命とは云へ、行末を思ふ時、送る者、送られる者、自ら涙は頬を濡らし哀愁の感一入

なれのかもつん。

短歌二首

いつまでも脳裡のすみに消え残る記憶たらんか去船のドラの音。

涙など流すものかと家を出て去船のドラに瞳うるむ。

エンジンの始動と共に互に見交す顔は益々にうすれ、遠ざかりゆく第二の故郷に対する離愁が身にしみ渡る。気がつくと船はいつしかポーナイランドを過ぎ灯台を右に見て進んでいる。右舷遥か海上を眺めると、夕霧の中に僅かに警備船が三隻、護衛しているのも新時代をそゝる。船窓はるかに瞬く晩市の灯を眺めつゝ、底知れぬ物思いに沈むうち、船は晩市の埠頭に横付けにされる。下船すると同時に待ちうけた二台のバスに分乗させられて、ヘスティングス公園内の仮収容所に収容されたが、ここはふだん共進会場なので、家畜の匂いがぷんぷんとして鼻もちならぬその中に起居させられ、既に各地より送られし同胞数千人と共に苦悪の中に五日間を過ごす

短歌

別れ来し灯かげ小暗き夜の船の窓にもたれてひとりもの思ふ
（晩市へ向ふ船中）

（7）

三月二十一日

午後七時十五分、シーエヌアール列車にて、我等一同は、晩市より隔ること五百哩のヤローヘッドの道路キャンプへ向かう。車中では夜の更けるのも知らず、不当な移動に神経を尖らせ、思い思いの意見を吐く者、酒に酔ひ痴れて歌を唄う者、人をなぐる者等々まるで蜂の巣をつついたような騒ぎだ。不安と不穏の喧騒の中に二昼夜は過ぎ、目的地、ヤローヘッドへ着く。

見れば人家一つない高山の麓である。重い柳ごおりを担ぎ人後に従へば、深雪の中に一連の貨物列車が我等の住家として迎へていた。ロッキー颪は噂以上に物凄く、ピューピューと音を立てゝ峰から吹きおろしてくる。山の端の月を眺めては、妻子の上に想いを馳せ、身に迫る寒気に夢も凍るばかり。

（2）初めの夜は、明日の仕事が気にかかり［illegible］

つの言。
む。
ゆくえ二の
ーナイランドを
と。夕霜
そ、る。
沈むうち。船
た二重のツラ
所謂行く所は、
として
ら送られ同
思う
帝ず隔るこ
は夜の更ける
息見を吐く者。
の巣をつつい
き。目的地、
ロッキー
人後に従へば、
吹きおろして
に迫る寒気に

旅なれず、仲々眠られない。まんじりともせぬうちに夜は明けた。

斧をかついで午前八時より降雪の中を、一寸あやまれば千尺の谷を眼下に、支人等と道路建設の工事にかかる。今朝は零下十六度と云う。この厳寒は寒さに馴れぬ身には相当こたえ、斧を持つ指先が凍ってきかない。切倒したブッシを焚いて暖をとりつつ四方山の話しに耽ることも屢々である。

短歌二首

来て見ればきさしに迫るロッキーの嶮しき雪山軒にそばだつ

一歩あやまれば千尋の谷ロッキーを越ゆる国道日々に建設す

(10)

前方にそびえ立つ有名なセブンシスターの山容を望み、澄み切った大気を胸一ぱい吸いつつ斧をふれば、木霊は静寂そのもの、高原に響き、北辰の気が自らも身に迫るのを覚える。この頃より無聊をまぎらす為に、仲間の余暇を見て再び作歌を始める。

一貨車に十二人づつ住わされ。外は肌身をさす程の寒さであるが、ドアーを閉めて外気と遮断すると、夜間も寒さを感じない。貨車の真中にストーブがあって、終夜コールが燃やされているからである。

夕食後ストーブを囲んで、四方山の雑談にふけるのは楽しいひとときである。この光景は、何と落ちぶれた姿ではあるか……

毎夜の如く将棋や賭博の遊びが始まった。自由を奪われ、前途に希望のない我々は、所謂刹那的、頽廃的、享楽的気分にならざるを得ない。人間の本能として致し方ないことではある。

しかしまだうら若い青年が、精神的に腐敗へと傾いて行く姿は悲しむべきことと思う。

四月十五日

ヤローヘッドで一ヶ月働いた。此処は人手が多過ぎるので、半数は明日からテテジャンキャンプへ移ってほしい、というので[illegible]

[illegible]馴れたこの地に留まり

6

（私あつたが）棄てられぬ思ひもあつたが、又一面環境が変れば、そこには未知の世界に対する好奇心ともいつたものが、未意識のうちに働いて来るのではあるまいかと。　そういつたあわい期待をかけて、チコインキャンプへ移ることに決めた。　ここから僅か三哩へだてた所で一と山越えた所であつた。

来て見ると、ここも矢張り貨物列車が我が家である。　ここに来て先づ何よりも嬉しかつたことは、貨車の直ぐ近くに春の陽ざしに碧く流れている千古の水を湛えた清流が静かに流れ、若芽の緑葉に日光が反射した。朝夕この流れに沿つて散策するのを唯一の楽しみとする。

この流れの果てに懐かしいバンクーバーのあることが気になつて、常に脳裡を去来する。　この頃やつと伸び初めたポプラ若葉が、朝のわが眼にきわ立つて美しく印象的である。

向いの山はなだらかにして、ムースの群が静かに草を喰みながら遊んでゐる殺壇を見るようだ。陽が西山に没して夕闇迫る頃になると、わが瞳をとらへた。（僕までも驚くところにせれ）山から下りて来る。ビーバーが五、六匹泳いで

また、この附近には多くの熊が棲息してゐる。　これ等の熊が日中キャンプの周りにやつて来て、捨てられた残飯を漁ると馴れ馴れしく食べて満腹になれば森の方へ帰つてゆく。　そのほか鹿、ムース、エルク、オヨテ等、有名な高原特有の動物が数多く棲息していた。　夕けはこの地方一帯は有名なジャスパー国立公園の一部に属し、禁猟区に指定されているため人間にも馴れ易いとのこと。

◎短歌一首。
足柄の金時の如く奥山に馴れて遊べる熊も寄り来る。

川岸の猫柳が春を魁けて咲きそめる。　その柳のもとで今年始めて聞く蛙の鳴き声に暫し耳をすまし、故郷の春を聯想することしばし。

貨車の窓よりさし込む三ケ月の光りは、氷山に反射して身を切る思いがする。　目を東方に移ずると名峰セブンシスターはまだ夕明りして、ほの赤く夕空にそそり立つている景観は誠に素晴らしい。ロッキー山麓でなければ見ることの出来ぬ絶景であらう。

折から夕ゆる友の尺八の悲曲は　ひとしほ身にしむ

短歌二首。
鎌の如き三日月所中る貨車の中尺八かなし誰のすさびぞ
黄昏の河のほとりつつ鳴くらしきビーバーの声一つ聞近し

NAKANO, VJO

6-4

…世界に対
…のではあるま
へ移ること
ていであった。
こゝに来て
…て、千古の水
…した。縁側
を唯一の楽しみ
…、
常に脳裡
…のわが眼に
…から遊んで
五、六日ぶりで
…
…如日中、キヤ
…て満腹になる
…、オヨテ等
…帯は有名な
…るため人間にも
…距も寄り来る。
…で今年始めて
…心することしばし。
…身を切る思い
…ほの赤く夕空
…の絶景であろう。
…さびで
…し

7.

総が日々完成をうながしていたテントハウスがうまく出来上り、貸室…ずこまれ移った。先生のそれのよく、又余り立派からぬ散を買いて、どうとこゝに移って来られた。運命のそれとつくづく思う。有難しさは

五月十五日

京城テントハウスへ初めて移ることとなる。生れてはじめて住むテントの中も住めば都。吹く風の季節故、寒さも感ぜず、高原の自然美を心ゆくまで味わった。

こゝで特に嬉しかったことは、ウ村を出立して二ケ月ぶりに、初めて日本風呂に入浴出来たことである。谷間の斉藤が水を引いて大きな日本風呂が完成したお蔭で毎晩の浴が出来た。我々は誰が何と言っても日本風呂が離せなかった。

この嬉しさは例えようがない。

キャンプへ送られて今日初めて今まで働いた給料が支給された。開封すると中に四弗七十五仙入っていた。ヤローへつと一ケ月、デコインに来て三週間、都合七週間に四弗七十五仙のペーとは一体どんな勘定であろうかと不審に思い尋ねたところ、僕の週給の中から、家族の扶助料として毎週二十弗を差引して残りを私への小使金として呉れたのだそうだ。

それにしても働き初めてから既に七週間。

初めての給料とは、ちょっとひどいな……と思った。

あはれな事になったものだと思った。

このテントハウスに約三ケ月余りいて、やがてこのデコインを離れる日がやって来た。

×

×

七月二十七日

全部デコイン道路キャンプが閉鎖されて、全員ホープ市へ向け移動を命じられる。これから行く先は妻子の住むコーストタウンへ行けるのだとお互いが決めこんでおれない。誰の顔を見ても今朝は嬉しそうである。この一帯の道路キャンプが全部閉鎖され、一連の汽車に乗り込んだのでおびただしい人数である。満員の列車は昼頃にホープへ着く。ホープ市へ全員下車させられ数時間待たされた。

その間一人一人調査をうける。希望へ入る家族のため東部へ行く者、グリンウッドへ行く者、カスロへ、スロカンへ行く者、サンドンへ、又ホープ市へとゞまる者などそれぞれ家族の居るコーストタウンに分配されたのである。僕らのグループの中から調査の際グリンウッドへ行きたい者が七名位居た。

僕はその中の一人で、妻子の居るグリンウッドへ行かせて貰えるように願った

710

711
+650
1361

NAKANO, VJO

6-4

8

調査官の言によると、目下スロカンに大勢の人が[illegible]いる。しばらくスロカンにて働いて貰いたい。それでクリスマスまでにはグリーンウッドの家族のもとへ行かしてやるとの返事であった。[illegible]致し方なく他の七名と共にスロカンへ送られる事になった。

357

ホープ駅を夕飯後出発した汽車は、時折小さな町に停車する。速力の至って遅い汽車である。夜が明けると沿線到る処に牧場がある。かつて写真でしか見たことのない広い牧場風景が、今は目の前に現実に展開されている。時折羊の群、こんもりと盛り上った林、清流も見える。傾斜地帯に羊の群がのろのろと移動している。汽車は次第に田舎の方に進んでゆくらしく、人家もまばらとなり、右も左も丘陵地帯がつづき、その起伏を縫って汽車は走る。これも又牧場がある。しかし人家が見えないので、無人の境を行くようである。すでにあたりは真暗い。勾配をあがるので機関車の震動が軽くなつかれる。ただ車窓の明りが、レールに迫る山や森林を照らしているのみだ。やがてネルソン駅に着く。

スロカンへ送られる途中、妻子の住むグリーンウッドを通過することは嬉しい。五ヶ月ぶりに妻と、いとしい吾が子[illegible]。汽車は僅か二、三分間の停車で、ゆっくり話しも出来ない。[illegible]車上の人となり、妻子に心を引かれつつスロカンへ向う。

十二月三十日スロカンに着く。[illegible]当地に五日間滞在する間に或る事情のため一行十五名と共に[illegible]へ護送されることとなった、

こうした激しい戦争の移り変りをよそに、私達は今日もたのしい俳句会を催し、先週募集した課題「天の川」が梅節宗匠より発表され一同はわが句が入選されているかどうか、固唾をのんで待ち受けている。選者より一句一句批評され説明があって最後に作者名の発表があった。次期課題「明治節」と発表されて盛会裡に散会。この句会は日増しに盛会を極め、アングラが閉鎖され、ムースジョウに移り、同地より所内の者が日本へ送還されるまで続いた。句会創立以来キャンプ閉鎖される迄の多くの作者の代表句を集めて、合同句集「鉄柵の寂」を編纂して句友の多年に亘る苦吟のあとを世に送り、戦時中アングラ収容所の記念すべき詩生活の輝やかしい記録を戦時に於ける日系人の歴史の一こまとして後世に残した。

一九四二年三月以来転々として移り変り、カナダ大陸を横断させられて心の落着く暇もないが、最悪の場所まで来たのでこれで腰がすわる。戦争がどう変ってゆくか全く未知数である。この中は井の中の蛙で、無鉄砲に日本必勝を信じた。交換船で何時帰国出来るかその日を待望しながら、十六ケ月も狭い柵の中で、檻の中のライオンのように、自由を束縛されて人知れず不自由を感じたが、或る意味では却って人間として得難い、此処でなければ味わえない人生の貴重な体験でもあった。こんな他愛もないことを考えながら眠りにおちていた。

外界と全く隔絶されたこの収容所では、毎日別世界が繰り拡げられた。それに比べて外ではヨーロッパの戦線、太平洋上に、南洋の島々に、今日も激しい死闘が繰返されているであろう。明日は又キャンプ内の報道部によって、去る一週間の戦況報道がなされる筈でそれを楽しみにしている。青少年の体育向上の為に柔道、撃剣などの練習が毎日盛んに行われる。青少年に日本精神を鼓吹させるために、大変有意義なことと信じ、僕は蔭ながら指導者に敬意の念を抱いていた。

収容所の生活はただ「単調」の一語につきると思う。如何にして時間を過ごそうかと云う事に苦心する。自分のやりたいと思うことが出来ない。この中では戦争がいつまで続くか、色々のニュースにまどわされて、何れを信じてよいか解らない。こんな時に、世界の動きが如何になりゆくとも少しも迷うことなく、毎日毎日を大地にしっかと足を踏みつけて、確実に歩みつづけ得る信仰がほしい。然しながら気の向いた時だけ聖書を読む位では、僕の信仰は少しも進まない。自由を束縛され、且つ孤独と闘っている僕らの為に、せめて週に一回でも牧師の伝道が、この中で行なわれたら多くの人がどんなに喜んで求道した事であろう。

単調な平和は誰も口にせず早き日暮を寒々と過ごす

晩秋の或日、窓外には砂土の上にしとしとと氷雨が降っている。ベッドの上に横になって、夕べになっても止みそうもない氷雨を窓越しに眺めているうち、ふと次の事に思い至った。自分は開戦以来二つの大きな転回を経験した。その一つは捕虜キャンプへ収容されたこと、他の一つは聖書に近づいた事である。この何れも開戦当時は夢想だにしなかった事だ。運命と云えば運命のようだし、考えるとただ不思議という他はない。

赤十字社代表の尽力でバンクーバー日本文庫の書籍がキャンプへ送られて来た。読物に不自由勝ちな我々に日本語の書物が読めるようになって皆大喜びである。多くの中から自分の好きな、万葉集、太田水穂、石川啄木などの歌集を見付けた。清新な趣味に渇した人の様に熱心に読んだ。無産者啄木の歌集は青年歌人だけに好感がもてて何回も繰返し読む。

檻の中のライオンに似る今ははやなすすべ知らず書をあさり読む

バーブワヤーの外の小高い丘に独逸兵の墓が七基、伸びるにまかせた雑草の中に埋っている。鉄柵の中からこの墓が全然見えないので、今日初めて墓が此処にあることを知った。炎暑身を焼くが如き盛夏の或日、私達五名銃剣を持った哨兵監視の下に墓の除草をさせられた。入所の折潜ったこのいかめしい獄門を、今再び潜っているのである。外から立ち止まって暫く見上げた。哨兵監視下とは云え、獄門を一歩出たことによって、今日は心が開放されたような気がする。鶏が鶏屋の中から春光の庭に開放されたようだ。これ等七基の独逸兵は第一次大戦に収容され暗夜に乗じてキャンプより脱出を試み、不幸にして哨兵に射殺されたとか、同じ境遇にある我が身に比べ、うたた同情の念禁じ得ない。

合掌して暫し黙禱を捧げた。

僕がアングラに着いた日「中野君よく来た、戦争は日本が必勝だ」と固い握手を以て迎えた（又一年六ケ月後に僕がアングラを出所する時も極力引止めた）友人白川君。又バンクーバー移民館内で計らずも道づれとなった峰本氏――この老人は僕が当キャンプに見切りをつけて出所の手続きをした事を知り、衆目の中であらゆる罵倒を浴せた。。白川君はアングラにて病死し、前記独逸兵と共に枕を並べて居り（白川君の遺骸はその後遺族の請願により許可されて、

郷里福岡県行橋市の祖先の墓地に懇に埋葬された）、鋒本老人はムースジョウへ移動後死去されたと聞く。人はそれぞれ顔容の異るように、又自ら思想も異るのであるが、この鋒本老人の如き無知のガンバリ屋が相当数いた為めに、出所を希望する多くの青少年が、その手続きを躊躇している態を見て気の毒に思った。

八月の声を聞くと共に収容所に二度目の秋が訪れたが戦争がいつ終るかこの中にいては少しも分らない。

多くの青少年は、この中の生活に飽きが来たように見受けられる。昼間は一定の時間、それぞれ好む娯楽機関によって遊びが行われるが、夜となれば昼間のはしゃぎは跡形もなく、ひっそりと静まりかえる。今晩はめずらしく三人の青年がベッドに腰かけて、上海娘の流行歌をよい声で唄っているが、心の中では恋しい母を慕い、故郷を思い出しているのであろう。自由を束縛されている彼等が如何にも哀れに見える。九時消燈されてもう二時間になるが仲々眠れない。夜警の靴音が近づいて来る。そして又遠ざかる。窓の下でチチロの啼く声が聞え、夜空はますます冴え渡り、天の川が鉄柵と十文字にきらめく。

山河みな悲しく見ゆる秋の野を詠む歌おのづと涙を誘ふ

別れ住み旅におぼゆる憂き思ひ夕べのチチロわれに来て啼く

今日はめずらしく美しい夕日を背景に青少年の一団によって日本の軍隊教練が行われる。規律正しい伝統的日本軍隊を思いうかべて、祖国がなつかしく遠い明治の御代の思い出に耽る。これが終る頃太陽はいつしか地平線に没し、やがて夕闇が迫ってくる。柵を吹き通す涼風に昼の暑さは跡形もなく、あたりは徐々に闇に包まれる頃、有刺鉄線に一万燭光が無気味に輝き、光芒は闇夜を昼よりも明るくする。

いよいよ秋も深まった或日、この中の生活にあきたらず、意を決し人目をさけて出所の手続を行った。行く先はトロント市内、カナダパーカー会社であるが、未知のトロントには友人もなければ、同行者も居ない。手続きをしたものの不安を抱きながら、一週間を経過した十一月十五日当局よりトロント市へ出所の許可を受け取る。何の変哲もない日が続き、世は既に冬の様相を呈して来た。大陸横断鉄道のレールが、血のような夕陽の名残を浴びて、オンタリオ州の原野を貫き、遠くバンクーバーへ続いている。空には雁が列をつくり夕陽を指して飛んでゆく。

雁の列消えゆく果に澄み透る広野にながき黄昏ありき

レール二本残照に炎えて一つになるこの安らぎにわが身委せん

夕陽と原野と冬木立、そしてレール。物音一つしない何と荒寥とした景色であろう。そのしじまを破ってけたたましく貨物列車が通り、毒汁のような煙が僕を押し包み、一瞬にして幻想の世界から現実へと引戻す。

やがて空に一番星が瞬く頃、監視所に一万燭光が点る。夜気は急激に襲い八十のベッド、四つのテーブル、数脚のベンチ、それに三つの暖炉の待つ薄暗いベットへと足を運ぶ。九時の消灯まで読書に耽る。

捕虜収容所出所

一九四三年　十一月十六日

愈々十六ケ月間の捕虜生活を終え、トロント市へ出発する日が来た。この時私の頭の中には大きな希望と、一つの地図が幻として描かれている。それはアングラ収容所から、未知の市トロントを結ぶ一つの鉄路がはっきりと引かれているのであった。最後の一夜の眠りを、思い出

深い収容所に過した僕は、窓の星の美しく輝く暁に目を覚し、出発の準備を思いめぐらす。捕虜の身であれば手荷物は簡単である。ただ気にかゝるは所内で書きためた詩歌や散文、日記など出所の際に没収されはしないかと懸念された。然し案ずる事もなく検閲は終った。この日出所した者が外に二名居た。

哨兵に守られて獄門へ向う途中、頑張屋が近づいて来るので危害を加えるかと思ったが、とうとう手は出さなかった。しかし散々悪口を並べ、罵り、つばきまで吐きかけた一人の老人が居た。獄門をやおら出て、以前に通って来た道を今度は反対に駅に向ってゆく。歩行の道すがら幾度となく厳めしい収容所をふり返って見た。

一冊の歌のノートを身につけてきびしきセンサをのがれ来にけり

トロント行の汽車に乗り、今離れようとするこの駅と「アングラ」と書いてある大きな字を感慨深く眺めざるを得なかった。

カナダ大陸の地図の上で、このアングラの捕虜キャンプなど一体どれだけの人が知っている事であろう。第二次世界大戦の折、この地に日本人捕虜八百余名の収容所があったと云う事な

ども、恐らく過去の物語として何人かの人々に云い伝えられるに過ぎないであろう。しかしこのアングラ捕虜キャンプが、戦時中に於ける在加日系人の防衛地帯撤退に関し特筆すべき材料を、カナダの歴史並に日系同胞の歴史に残した。カナダ日系人の歴史の中に見逃す事の出来ない何等かの光を放つであろう。同時に僕の一生にとって決定的な転回を与えた場所となり、僕個人の歴史に永久に忘れる事の出来ぬ場所となった。

やがて汽車がプラットホームへ入る。乗客は私達三人、下車客なし、食料品少量降されて発車。車窓より収容所を眺めつつ八百人の同胞よ、アングラよ、さようなら。

赦されて獄舎をあとに発つ旅の朝のこがらし心に沁みる

思ひ出のアングラの地をあとにして未知のトロントへ発つ汽車にのる

汽車は今懐かしいB・C州の家族を背に、更に東部を指して走る。車窓に拡がる新らしい風景が早くも過去を忘れさせ、心の目を前方に向けしめる。沿線到る所に牧場がある。長閑な放牛、羊群、人家はポツンポツント点在している。画のような素晴らしい丘陵のスロープに羊群の移行する態、ただ雄大の一語につきる。空は晴れきって暖かく、捕虜であった事も忘れてしまいそうだ。「こんな所に妻子を呼び、青年の頃希望に燃えていた〃カナダの疎放農業〃をやったらどんなに幸福であろうか」こんな思いが湧いた。籠から放たれた小鳥のように、第一日目から新らしい希望に満ちた世界が、心の視野を新らしく大きく拓いてくれた。前途に何が待っているか多少の不安を意識しつつも、胸が脹らむようだ。汽車がトロント駅へ近づくと市中到る所に街路樹が目立つ。午前十時トロント駅着。カナダパーカー会社員の出迎をうけてサマビル共同宿舎へ安着。翌朝より就働。一ケ月後B・C州グリンウッドより妻と一人の女児がトロントへ引越すと云うので親子三人の住宅を捜した。

我が腕にもたれ戯るいとし吾子釈かれてわれのかへりし今日を（親子再会三首）

めぐり合ひ今とりもどす団欒の卓の水仙匂ひも高く

捕虜キャンプのすさびし心あたためて今ぞ再起の構想を練る

捕虜キャンプ雑詠（アングラ）

休戦の喇叭の鳴る日を待ちわびつ雪のキャンプに春は来にけり

春となり砂地のたんぽぽ咲きそめて孤独のわれの命をゆする

もの思ひけふも暮るゝか夕空に啼き行く鳥をふと見上げたり

夏の凪おだやかに吹く中にゐてわれは次第に従順となる

原始林を侵す思ひに立木を倒し哨兵監視下に薪を切らさる
ただよふはシチューの匂ひ柵外に薪切る胃袋　空腹をつぐる
稀有な世の時のあゆみの刻々の停滞ゆるさず読書を励む
運命を吟味するほどの寂しさを日々重ねつつ耐へゆかむとす
老人が庭に咲かせしコスモスに人去り来たる花は揺れゐつ
妻とわが悲しみをつなぐ蜜蜂の花うつりして揺るるコスモス
足も文も自由奪はれ憤るわが出す返書妻へ届かず
空は蒼く紅葉色づくアングラの秋は再びめぐり来にけり
空罐に朝顔咲きぬ只管に生きんと思ふ捕はれの身の
悩みなき人とよそひて霜光る朝の地上を歩みぬ今日も
コスモスは小さく咲きて暁けがたのバーブワヤに吹く秋風の音
黄昏の鉄柵渡る風の冷えけふも日課の二哩歩行
風死して日蔭の砂に霜光る黄昏れて朝顔に紙のおほひする
孤独つのりて男の眼に涙あり秋逝く空の青さ身に沁む

頑張屋の友の死かばね鉄柵の錆の滴る土に埋めらる
夕映の光りさしゐる鉄柵に芒の穂むらわれに揺れくる
硬軟の対立きびしきキャンプより出所の手続き人目を避ける
かつえたる熊の如くに柵のなか行きつ戻りつタイムをつぶす

一九四三年　十一月

トロントにて家族が一緒になり一応心が落付く事が出来た。その頃トロントには日本人は極少なく、従って僕はルームを探すに余り苦労はなかったが、政府の散在政策に沿って数年後ゴーストタウンから多数の日系人がトロントへ転住してきた結果、急激に増加し数千人に及んだ。その頃からルームを借りる事が段々困難となった。

トロント市の日系人数は年々増加の一途を辿り、戦後二十数年を経て、ここ一、二年新移住者の入市をも含めて、現在約一万人近いと云われる。戦後一世は戦争の為め蒙った物質的損害を挽回せんと、馴れぬトロントに於て、始めてカナダに上陸した時と同様、パイオニヤ精神を以て再出発した。それは文字通り悪戦苦闘、遂に戦前の経済状態を取り戻し、遙に凌駕して現

在は日系カナダ人として、白人同等の生活をなしつつある。我等の先輩の多くのパイオニア諸氏は、カナダに良き種を播き、よき実を結び、日本人の真価をカナダに発揮して、近年木の葉の散る如く次ぎ次ぎ世を去ってゆく。一抹の寂寞を感ぜざるを得ない。

一九四四年

早春も過ぎて五月を迎えた。トロントの五月は永い冬から解放されて、麗かな春光を浴びるようになった。

この頃のニュースは、アメリカの機動部隊が関東一円に大空襲を行い、同時に数個の海兵師団が硫黄島に、また沖縄に大規模な攻略作戦が展開されたことを報じた、またヨーロッパの戦線は連合軍が、ライン河の線に達し、渡河を開始して最後の突入を報じている。

確か五月二日であったと思う。ドイツの首都ベルリンは、ロシヤ軍の攻撃のため遂に陥落、五月七日にドイツ軍は連合軍に対し、無条件降伏をした。かくしてヒットラーとナチス国家は地上から姿を没し、劇的な終幕を閉じた。

その時僕はトロント市内ロバート街のユダヤ人の二階に住んで居た。家主のおばあさんが入

口より僕をしきりに呼んでいる。始めのうちは例のように又始まったなと相手にしなかったが、遂に降りて見ると街上にはドイツの無条件降伏の号外が出て居り、寺院のサイレンも鳴りはじめた。あちらからも、こちらからも交錯して聞えて来る。破竹の勢であれ程強かったドイツ、日本と三国同盟を結んでいたドイツ、日本の片腕が無惨の敗北をした訳である。嗚呼やっぱりドイツは敗戦に終ったのか………実に感慨無量である。今回の大戦があまりにも惨酷な徹底した破壊と殺戮の連続であったことを聞いて居たせいか、勝敗を越えて平和回復の喜びが実感された。

いつまで続くか見透しのつかなかった戦争も、ドイツの敗北によって大方半分は終ったような気がする。今までナチス、ドイツの国力の強大さ、ヒットラーの威勢の盛んであった事、又ドイツの全体主義国家の秩序整然としていた事を教えられていた僕は、如何にドイツ民族に崇敬の眼を向けていた事か、しかし今は完全な敗北である。僕はこの時、英雄として国民から崇拝されるものの末路の如何にあわれな、その実態をはっきりと見せつけられた。我々は先にムッソリーニの惨めな死を知り、こうした一時的英雄に導かれ引きずられる国家、国民の如何に悲惨な事かを痛切に感ぜずにはいられなかった。

次はいよいよ日本の番である。妻と語る声も今日は特に悲痛な思いである。日本一国が殆んど全世界相手の戦である。到底勝てる見込みはないと思った。もうこの戦争も先が見えている様な気がする。こうなっては無益な戦争をいつまでも続けて、いたずらに生命を犠牲にするより早く戦争の終結する事を僕はひそかに願った。

第二次世界大戦は、世界の歴史に一大回転を来たしたと同時に、僕の身にも一大転換期となった。アングラ収容所より開放されて、トロントで今の会社に働くことになった時の僕の気持は、最初ビクトリヤ港に上陸した時と同じ決心のもとに、文字通り裸一貫からやりなおしが開始された。今から二十五年も前なのでその頃はまだ若く随分働いた。妻もトロントへ来て以来一年余り遊んだ或日、小さい子供がないので働きに出たいと云う。「女は外に働きに出なくともよい」と私の極力止める言葉も聞かず、「達者であるのに内にじっとしているのも退屈だから体の健康のために少し働いて見る」と云うので本人の意志に任せた。二人で働き、間もなく住宅を購入して引越した。矢張り我が家と云うものは気分も落付き、妻も子も喜び、日々生活の安定を確保することを得て希望に満ちた日を送る事が出来るようになった。

一九四五年

戦争も愈々終局に近づいた気配が濃厚となって、多くの人が戦争の終る日のことばかり気にかかっているようである。然しトロントの外観は少しも動揺の様子はなく、どこで戦争をやっているのかと言った底力を見せている。

戦況はすでに硫黄、沖縄島も陥ち、日本本土が次第に戦場と化しつつある事をニュースは報じている。更に機動部隊が傍若無人振りを発揮しつつ内地の到る処を攻撃している。その上、艦隊より陸上砲撃まで加えられている。こうなると日本の敗戦もいくら品屓目に見ても時日の問題であろうと思われた。

七月末頃であったか遂にポツダム宣言がニュースに報道された。引続き「無条件降伏」の言葉が新聞紙上に出る。遂に「大和魂」とか「神州不滅の精神」はどこやらへ飛んで消えてしまった感じがする。間もなく怪ニュースが報道されて私達を震撼させた。それは「原子爆弾」を広島と長崎に投下して、両市潰滅してしまっていたことである。戦争とは云え事もあろうに非戦闘員に対して何と無茶な事をしたものだ、どう考えても実感とはならず、心の底から激しい

憤りが湧き上ったのも無理ないことである。

その間ソ聯の参戦が伝えられ、祖国日本は愈々最後の段階へ追い詰められた事がひしひしと胸に迫る。情勢はポツダム宣言を日本が今日受けるか、明日受けるかと云ったところまで来た。

八月の或日、わが職場で数名が朝刊を囲み互に話し合っている。何事かと近寄って見ると「原子爆弾」という大きな見出しで広島、長崎は潰滅したことを報じている。一人のドイツ人が僕の顔を見るなり「君のホームは日本のどの町にあるのだ」と沈痛な面で尋ねて呉れた。「広島でも長崎でもない」と答えると、それはよかったね……と僕を抱き締めて悦んで呉れた。

今日は朝から炎暑である。仕事から帰宅した頃であったろうか、サイレンが街のあちらこちらから、高く低く互に交錯した音が余韻を引いて聞えて来る。この前のドイツの無条件降伏と比べてみて、今までに全く経験のない最も悲痛な瞬間を味った。しばらくするとさっきの瞬間と異ったものが、心の中に「平和」という気持ちが全身に甦って来て、安堵が全身に漲る。「こ

れで全世界の戦争は終ったのだ。もうこれで人間同志が互に殺し合うことのないように」と静かに神に祈った。「平和」の到来――僕はこの時ほど「平和」という言葉を沁々味わった事はない。この惨めな戦争を体験した全世界の人々が、この歴史的瞬間を二度と決して忘れる事がないなら、このような世界大戦は再び起らない筈である。愛する祖国が戦いに敗れたという痛ましさ、何ともたとえようのない深い悲しみに沈んだのである。然しこの場合勝敗を越えて、悲惨な大戦争が終ったという喜びの方が圧倒的であった。

かくして全世界に平和の曙光が再び甦った。

この時静かに第二次世界大戦のあとを振り返って見る時、思いも寄らぬ方向を世界史は辿ったものである。敗戦国日本について見るならば、今度の戦争は結局何一つ得るところはなかった。ただ幾百万の尊い人命の犠牲と、荒廃した国土だけが残っている。戦争の罪悪や悲劇をきびしく強調してもまだ足りない。こうした恐ろしい悲惨事が、少数の誤った指導者によってなされて来たことを思う時、一国の指導者たるものの責任の如何に重大であるかに想い到らざるを得ない。同時に国民の一人一人が、こうしたことに真実か否かを批判する能力を持たなくて

はならないことを痛感させられた。日本は幸にこの敗戦を契機に一大転機をなした。日本は今後更に世界に大きく視野が開かれ、デモクラシーの一員として、世界の日本として、二十一世紀の高度の文明を声高らかに世界に示したいと希うものである。

無条件降伏

八月十五日

この日は日本の歴史にかつて無かった悲しい日である。日本の無条件降伏に続いて、マックアーサー元帥の率いる連合軍は続々と日本に進駐し、その様子が新聞、雑誌その他のニュースを通じて全世界に報じられた。九月になってから、東京湾内の米戦艦ミズリー号上に於て無条件降伏の調印式がなされ、それ以来日本国内に関する記事や占領下における日本の写真が雑誌などに見られるようになり、海外に居る僕は涙なしには到底見られなかった。

あれから早くも二十余年、日本国民がこのような一大転機を経験しつつ、官民一致協力してあらゆる面で国力の挽回に努めた甲斐あって、躍進日本の原動力を世界に示す事が出来た。何

と素晴らしい事であろう。無条件降伏をなした当時、想像も及ばなかった事が、今は自分の眼前に現実となってあらわれ、全世界の注視のまととなっている日本である。

日本の敗北によって戦争が終ると、かつて収容所に居たとき、井の中の蛙の如く、正しい世界の動きを知る事が出来ず、いつもデマの戦争ニュースに迷わされ、日本必勝を常に信じていて、終戦後は戦勝の祖国で暮らそうと思い、交換船で帰国出来るように政府に申込んでいた、ところが日本の敗北となり、百八十度の転換をして日本行きを取消すことに決め、オタワに中止を請願した。二週間後に政府当局より、取消を認めるとの丁重なる回答が来た時はほっと一と安心した。思えば世界の微妙な動きと同様に、僕自身に於てもここ三、四年間に猫の目のように変った。今から顧ると随分軽はずみな事をやったものだと、一つの笑い話にしているが、その時はみな真剣に考慮の上で行った事である。

カナダ国民となる

その頃カナダ政府は外国よりの移民に対して、頻りにカナダへ帰化を奨励していた。僕もカ

夕飯は同市のレストランで皆一緒にすませ、その夜はネルソン駅で乗って来た汽車に腰を掛けたまゝ一夜を過す。

翌朝になったが今朝はどうしたことか気分が勝れない。いつの間にか自分等の乗っている汽車は発車して スロカンへ向う。狭まい谷間を通ってゆく。汽車の速力の遅いのに驚く。目的地が近づく頃汽車は単線を行く。

七月三十一日。昼頃であったろうか、目的地スロカンへ着いた。此處へ来て第一印象は、想像していたよりずっと淋しい所で、文字通りゴーストタウンであることが直感された。

スロカンへ落ち着いたものの、毎日おだやかならぬ日々が続いた。思いかへせば、我々はかつて道路キャンプに働いていた頃、政府当局の代表者が時々我々のキャンプを訪れ一場の話しをなされ、我々の一同に対してにっこりして丁寧に申して下さった。「皆さん、おとなしく働いて下さい。遠からずこの一帯の道路キャンプを閉鎖するから、その時は皆さんを皆さんが常に待ち望んでいる、家族の居られるゴーストタウンへ送って貰います」と約束して呉れたのだ。思えば私共はその日の来るのを楽しみに、一日千秋の思いで今日まで従順に働いてきたのであった。然るにキャンプが閉鎖された今日、当局は我々との約束を無視して実行せず、家族の居ないスロカンへ送ってしまった。これは当局としても理由はあった。

当局のこの約束を無視した処置を正すために、我等一同は毎日コミッションを訪れ、道路キャンプに於て我等との約束を今一度実行するように請願した。

しかし、その交渉は何等効を奏せず、却って悪結果を産み、晩市、移民館に護送されることになった。

x

夜空に輝く星に一点の希望を托して、テントハウスの中のブランケットにもぐって横になる。モーフの下で頻りに啼きたてるキリギリスの声が、今宵のわか

ナダ帰化に就いて永年真剣に考慮しつつあったので愈々意を決した。

二人のわが子が日系カナデアンとしてすくすく成長しつつあるし、子供にとってはカナダは当然母国である。可愛い二人の子女に引かされて、愛する祖国日本の国籍を潔く捨てざるを得なくなった。

帰化証獲得の願書を提出したところ、間もなく市役所に出頭せよとの通知を受け、夫妻で行った。一人づつジャージの前に呼ばれて色々な質問を受ける。それにはっきり回答しなければならぬが、僕はこれまで日本的な伝統や観念を身につけているため、愛する祖国を捨て、日本国籍を捨てて、カナダの国民になると云うことは断腸の思いである。もとよりこれは覚悟の上で申込んだのであるが、いざとなったら、ジャージの前で質問に同意なしかねて躊躇した。けれども凡てを思いなおして「イエス」と答え、最後に宣誓書にサインをしたのである。署名するに当り、わが心とペンを持つ手が、かすかにふるえた。

墳墓の地カナダと決めて宣誓紙に署名するわが手はふるへたり

知られてないカナダ

羽田へ着いて祖国への第一歩を印した途端、約二十名のカメラマンにフラッシュを浴びせられて以来、東京を発つまで数多くの新聞記者、テレビや放送局の報道陣に追い廻され全く胆を抜かれるやら、戸惑うやらの連続でした。

「何故にかくも大きく取り上げられるのか」というのが私の疑問で、機会を得て尋ねましたところ、私がカナダで最初の入選者であり、又カナダと云う国が特定の人を除いて、日本人一般には余り知られていないので、これを良い機会にカナダという国を日本国民に紹介しようという放送局や新聞社などの意図に起因するとの事でした。従って個人の自由など無視した報道陣の強引とも云うべきやり方には閉口しましたが、この事を知った後は、及ばずながら色々な機会を利用して、私達のカナダを認識して頂くように努めたつもりです。

また日本ではどの新聞も、「はるばるカナダのトロントから」と大きい見出しで書き立てられ、日本放送協会からは『時の人』として報道されましたので、カナダに縁故のある方はもと

より、一面識もない人から沢山のお便りを頂き、お近づきになれました事は、私の最大の喜びであったと心から感謝して居ります。

丁度、宮中歌会始の最中でした。私の故郷福岡県椎田町では、福岡放送局と東京放送局が連絡して、九十才になる父と東京に居る私と、テレビを通じて親子の対談を計画中でした。

福岡市よりヘリコプターが父を迎えに来て小学校の校庭に降下しました。やれ珍しいものが降りたと云うので生徒等が黒山のように集りました。こわされたら大変と中学校々庭へ宿替えしたが、此処も同様、三度目に川の堤に降りたが、父はヘリコプターを見た丈で不安を感じたらしく、もう福岡へ行かないと云い出し、致し方なく私の兄が父に代って福岡へ行き、東京放送局の私とテレビで時の対談を致しました。

こんな有様で私の故郷では新春早々大きな話題を投げかけられ、上を下への大騒ぎでした。

御歌会が終った一月十日午後四時から十時までN・H・Kと東京放送局のテレビに出演し、その中間に都下各新聞社及びトロント英字記者などのインタビューがあって、最後に東京放送局の御好意で、十時横浜発の汽車に間に合うように見送って頂いた時は、身心共に疲れ果てていました。

郷里に帰ってからも余りの歓迎ぶりに却って面喰い、色々な会合に引張り出され、ゆっくりする暇もありませんでした。

カナダでも十二月二十四日の真夜、宮内庁より入選の電報が入り、夜が明けると日本に劣らぬ程当市のテレビや各英字紙など、小宅へ押かけ家人を驚かし、全国的にテレビとニュースで報道したので、白人社会も日系人社会と同様、大いに喜んで下さいました。そしてカナダでは始めての入選者なので、白人はみな日本の宮中でこんな行事も前から続けている事に驚き、且つ又「短歌」に就て大変な興味を持ったようです。

この度、私のためにN・H・K並に東京放送局の深き御厚情を心から感謝申上げます。なお帰加に際し「時の人」（N・H・K）「お歌会始め」（東京放送局）のフィルムをそれぞれ御土産として御寄贈下さいました事を重ねて厚く御礼申上げます。（一九六四年二月）

祝、開館式（トロント市日系文化会館）一九六三年　五月

朝日に映えてそよぎたつ
若葉の森にこだまして
けふのよろこびみちあふる
老も若きも歓喜して
集ひより来る我等が会館
文化会館栄えあれ

けふのよき日にオタワより
ピアソン首相　牛場大使
吉沢日加協会長
はるばる日本より飛来して
開館式に色添へぬ

いざや祝はんもろともに

カナダの歴史かがやける
パイオニアの辛苦しのびつつ
同胞一丸身のかぎり
ここに捧げて建てすゑし
木の香も高き新会館
いざや祝はんもろともに

三世　四世我等が子孫
ここに栄えて我が民族の
世界の民ととけ合ひて
祖国日本の誇りを示し
カナダの為に尽さばや
いざや祝はん文化会館

モントリオール　万国博主題歌（一九六七年）

カナダよい国若い国
建国ここに百年の
記念と世界に呼びかけし
万国博の歌声は
緑の山河に鳴りひゞく

ニュースレジオで万国博が
早く来いよと呼んで居る
カナダの大都モントリオールで
世界各国皆それぞれの
お国自慢の品が待つ

きこえないのか万国博の
開幕ドンが呼んで居る
老母も孫もうちつれて
ためたお金をポケットに
いざ見にゆかん気もはずむ

かがやく朝日明るい行く手
我が家をあとに伸びる道
飛ばす自動車（クルマ）のリズムも軽く
歌もはずむよ花野を越えて
やがて近づく万国博が

東西南北海山越えて
皮膚や言葉は違ふとも
心は一つ万国博よ

あがる花火に平和の星も
闇にきらめく世紀の空に

ローレンス河の流れも清く
風にひらめく万国旗
会場はいればとゞろく胸に
老いも若きも血汐ぞたぎる
ああ　素晴らしい万国博

中野氏の栄誉

東京　鈴木重三

今年の宮中歌会始の御儀にカナダから初めて、トロントの中野武雄氏の詠進歌が立派に入選の栄誉を得られた事は、誠にめでたい極みである。日系同胞をあげてさぞお喜びでありましょう。私はカナダを去って、早や二十余年になりますが、在留当時の意識は今尚少しも衰えず、在加同胞に事ある毎に一喜一憂、感想を同じうするものであります。

この度の歌会始入選の栄誉に当りましても、内地人の喜びプラス在加同胞の喜びを分けて戴けると自ら信じて居ります。

中野さんの名歌に対して私は何も批判する資格はありませんが、「カナダを墳墓の地ときめ宣誓書に署名する時に書く手がふるえた」というその純真の思念に強く胸を打たれたのであります。

帰化する動機は色々ありましょうが、何れにしても日本国籍を離脱する事は、はぐくみ育てられた親に別れる思いであると同時に、新国籍を体得して新抱負に胸がふくらむでありましょ

う。新旧の哀惜と抱負が錯綜して、署名の手がふるえるのは、誠に自然であり、中野さんの帰化がそれだけ真剣である事が察せられます。

○

カナダにおける私の長い新聞生活は、専ら日系人がカナダの国是に同調すると共に祖国との連絡を忘れない様に、またむずかしいながらも、その美風を温存するようにとの念願でありました。

爾来世情は大きく幾変遷がありましたが、中野さんは帰化しながら、その真情を国風によまれた事から、宿願を回想しつつ祝意と敬意が湧き起るのであります。

一九六四年　一月

（元加奈陀新報社長）

日本へカナダを紹介の功

トロント　岩崎與理喜

この頃日本の親類から来る手紙に、中野さんの事が色々と書いてある。トロント市の人と言えば私の親類は、私達と親類の様に近親感を感じるらしい。富山、名古屋、岡山、広島と親類が多いから、その人達は大いに感激して、テレビやラジオ、ニュースで中野さんの事を知って、欣んで私達に手紙をよこして居る。

何れにしても今度の中野さんの栄誉によって、カナダ、特にトロントの事が、日本全国に知れ渡った様だ。これは中野さんが歌会始のお題に入選した以上に、大きな功績であると思って居る。

日加親善と云う事は口にし易いのだが、実際問題として中々むずかしい。然し今度の中野さんの功績は、偉大なものであったと思う。カナダのトロントと云う言葉は、日本全国に知れ渡ったのだ。カナダを知って貰う事は、日加親善に通ずるハイウエイである。

私の妻の姉は名古屋に住んで居る。その姉の手紙に「トロント市の中野さんのテレビやラジ

オの放送でうちの親類の人のように感じられ、今度の栄誉に泣きました」と書いてあった。私達夫妻もこの手紙を読んで、顔を見合わせて涙した。

私たちは年とって、涙もろくなったと云う事もあるだろうが、今度の中野さんの栄誉と、カナダ紹介に努められた功績には頭が下がる。今、日本に居るカナダに居た人は勿論の事、関係者には夫々大きな感激を与えて居る。私は常々国際親善は軍刀の音でなく、国民同士の交歓であると信じて居る。特に今度、中野さんは日本の和歌を通じ、日加親善の一石を打たれた事は、私達として感激が深い。日加文化交流と云う意味からも、中野さんの今度の詠進歌入選は、大きな意義がある。

一九六四年　二月

（大陸時報社長）

巻末記

恩師四賀光子先生のおすすめによって歌集「宣誓」を私の第一歌集として版にしました。昭和十六年（一九四一年）より、昭和四十三年（一九六八年）一月まで、満二十七年間の詠作二千首の中から五百六十八首を四賀光子先生に選んで戴きました。

大部分は潮音誌上に、一部は大陸時報、ニューカナデアン両紙に発表した中から、極少数未発表のものを交へてをります。勤労生活の中からにじみ出た念々歩々の歌でありますが、忙しい中から常にこの一筋に願いをかけて来た生活でありました。

その他に文章二つ㈠「収容キャンプ回想記」これは一冊の本として他日出版したい希望でありましたが、この度歌集出版に当り四分の一に削除いたして発表しました。㈡「知られてないカナダ。詩二つ「トロント日系文化会館」と「モントリオール万国博主題歌」、短文二つ、㈠「中野氏の栄誉」鈴木重三様（元カナダ新報社長）㈡「日本へカナダを紹介の功」岩崎與理喜様（大陸時報社長）で、右は大陸時報に掲載されたものを転載させて頂きました。岩崎、鈴木

御両氏に深謝いたします。

私は亡父の血を享けて幼少の時より文学を好み、郷里薬上高等農学校時代に啄木の一握の砂を愛誦していた。一方その頃より頻りに海外雄飛の希望に燃えて、周防灘の岸に立ち、遠く水平線を見つめて、もの思ひに耽ることしばしばでありました。その時心の中ではきまった様に大陸の疎放農業を夢見て目を輝やかせている私でした。通信教授によって短歌を正式に習い初めたのは大戦数年前のことで、これからしっかり勉強をしようと思う時に開戦となり、ロッキー山麓の道路キャンプに送られ、孤独な生活は好きな作歌に大いに拍車をかけました。

戦後シアトル短歌会のメンバーに入れて頂き、同会のお世話になって居た事から、一九四九年末潮音社に入会することを得て、四賀光子先生の御指導を戴くきっかけとなりました。以後二十年に亘り四賀先生の愛情と熱ある薫陶を頂いて、私如きものもここまで峻しい山路を登って来た事を、幾重にも感謝し、更に今後も御指導に支えられて残る峻険な山路をよぢ登りたいと思います。

その間昭和三十九年の宮中歌会始の御題「紙」に「墳墓の地カナダと決めて宣誓紙に署名するわが手はふるへたり」と詠進いたしましたところ、思いがけなく宮内庁より入選のお知らせ

を頂き夢かとばかり驚きました。一月十日の宮中歌会始の御儀に、入選者として参列させて戴き、畏くも天皇、皇后両陛下を始め、皇太子殿下御夫妻の御前にてわが入選歌の披講がなされこの光栄に何とも申し様のない感激でございました。

その時鎌倉山荘にて、四賀光子先生より

思ひ入りしこの道一つとげ給へカナダの土に骨は埋むとも

有難きお歌を戴き、身に沁みてカナダへ帰って参りましたが、このお歌はその後、常に私の心の答になって来ました。

又宮中お歌会のあと、御苑で拝謁を賜わりました時、畏れ多くも天皇陛下から頂いた、「これからも歌の道に一層励まれる様に望みます」との有難き御言葉にこたえまつる様に懸命に精進いたしたいと思います。

栄ある御歌会を無事終り、トロント市へ帰り来ましてから、歌に趣味のある人々や、当市如月倶楽部の希望によって、カナダに戦後初めて一九六四年九月二十五日に短歌会がトロント市に創立されました。以来毎回三十名内外集まり全カナダに呼びかけ熱心に短歌を勉強して居り、年と共に隆盛を極めて居ります。

なお歌会始入選の宣誓の歌は、加奈陀の中学校の教科書にも採用されましたので、四賀先生の勧めによって本歌集の書名とし、題字並に序歌を頂きましたことは感謝に堪えません。

終りに編輯についてお骨折りいたゞきました太田青丘先生、出版についてお世話頂きました柏葉書院吉岡一郎氏に厚く御礼を申上げます。

一九六九年　一月

カナダ・トロント市にて　中野雨情

本名（武雄）

歌文集

宣誓

昭和四十四年四月　五日印刷
昭和四十四年四月十五日発行

定価　八〇〇円

©一九六九

著者　中野雨情
（武雄）
216-Ruskolme Rd.
Toronto 4 Ontario.
Canada

発行者　吉岡一郎

発行所　柏葉書院
東京都渋谷区代々木本四一ー一七（大賀ビル）
電話（三七〇）ー六四七三

印刷・信毎書籍印刷株式会社
製本・富士製本株式会社
製函・加藤製函印刷株式会社

悲痛をそゝる。何かこうしていることが夢でも見ているような錯覚に陥ってしまう。
僅か一夜を境として、急転直下の運命の変化、全く予期しない急激な我が身の変り方である。今という現実に我が考えはついて行けず、夢かとばかり、わが心を確かめてみた。
明け易い夏の夜は早や東天が白みかけた。やがて全視界が眼の前に開けた。前方にスロカン・バレーを囲むなだらかな山々は、まだ静まりかえって、朝の大気の中に眠っている。太陽が徐々に昇ると、周囲の山々が輝きを増す。見渡す限りどちらを向いても緑一色で滴るばかりである。七月の太陽はそれらを容赦なく強く照りつけている。バレーを流るゝ清流が谷間を縫って、曲りくねってスロカン湖へ注ぐ。波一つない湖をめぐって、連山が高く低く連なり、湖上に美しい影を写している。目も覚めるばかりの紺碧の湖上に、今ヨットが一つ浮んでいて、この静けさ湖畔の朝の景色を一層引き立てゝいる。
スロカンには僅か一週間の滞在であった。期間が余り短かかったので、記憶もうすれ、印象に残るものも少ない。

(11)

いよく明朝晩市移民館に送るとの命令が下る。その朝は未明に起床して、簡単に朝食をとっていると、マウンテーがやって来て、まだ朝気が晴らぬまゝ、トラックの中に押し込んだ。マウンテーのいかめしい態度が、引かれゆく現在のあわれな自分にたまらない威圧を感ぜしめた。みじめなのはいつでも敗者の位置であることが身にしみる。
マウンテーに護衛されながら、悪路を走るトラックにガタガタ揺られ、やがて、けわしい山の端のせまい路にさしかかった。運転を誤ったが最後、車もろ共千尋の谷。身心ともに縮み上る思いで逃れた。
ネルソン駅に着いたが、プラットホームに我々を乗せる汽車は既に入っており、そのまん中の一輛に入れられる。

(20字)

570
−280
290
−270
20

NAKANO, VJO

6-4

錯覚に陥
急激な残
かとばかり。
の前に開けた。
て、朝の大気
見渡す限
れらを容赦
ありくて
なり、湖上に
ヨットが
ある。
たので、記憶
は未明に起
、まだ朝
めしい態で
めた。
揺られ、
られが最後
は既に入って

その時未だ夜は明けていなかった。（夜はまだ未明である）護衛のマウンテーを初め
周囲全体の空気が、何となく殺気立っている。生れて始めてマウンテーから
監視される身となり、少しも自由を束縛されなければならないものかと思うと、
しゃくにさわってならない。

ホープよりスロカンへ送られた時は、まだ一つの淡い望みを持っていたので、左程まで
憂鬱でもなかったが、スロカンに於て先週以来上述のような役目となり、
マウンテー護衛下に晩市に向う今日のわが心中の如何に激昂している
ことよ。この時自分はあらゆるだけわが心を冷静にしようとつとめた。しかし
その効は無駄であった。
再び妻子の住むグリンウッド駅を通過せねば晩市へ行けない。しかしながら今は
グリンウッドを見れば前回にも増して涙の種子である。
激し方ない。
汽車がグリンウッドに一分間停車した。妻子は涙に濡れて別れに来ていて
ハンケチを頻りに振っている。
ら へ行くのである。自分は何から修理工場へ行き、
金銭を持つ必要なしと思いハンケチに包
んで窓より妻へ投げた。
妻子は振っているハンケチの見える限り窓から手を振った。

昼夜煩悶の連続のために、変りゆく窓の景色を眺めることもなく、沈思
の状態は晩市迄続いた。
マウンテー監視のうちに汽車より降りようとすると、始めてカナダ兵隊
を間近くこの目で見る。剣付き鉄砲を持って、剣先きを我等の方に
向け、今にも突き殺さんばかりの姿勢である。彼等の視線に敗者の

370
-90
280

NAKANO, VJO

6-9

(12)

一屋舎が炉りに燃えた　こちらもすごい目で彼等を睨み返し睨やせ、
すぐ一定の室に閉ぢ込められた。一人宛呼び出されて携帯品をとりあげ
られた。すぐ牢獄につれられた。女人三十余名が居て我等が今入ってきたことを
ひどく心からよろこんでくれた。同行の女が増えたからであろう。

この中には既に先着の三十余名が居たが、しかし皆んなの青ざめた顔色を見て
僕は不安を感じた。見ず知らずで今まで避難民同様で、みじめな不自由な
れな姿に見えた。しかし自分も今日からこれ等の人々と共に獄舎生活を余儀なくさせられることを悟った。

神経を過激に使ったためか、夜は疲労し、すべての心を少し落ちつかせようとつとめた。フロワーの上に暫し
横になって一睡もしていない。
つまってゐるかと思ふと、それはすぐにくずれてゆく。これは人間の静さと云ふ意外に説明
夜になると板のフロワーに毛布一枚にくるまって寝る者が多い。
実に憐れに思はれた。——朝から晩まで一回も外出させて貰えないので、朝の中に金鋼
の小さな窓に向って、新鮮な空気を吸ふ事が出来る。呼吸し、涯しない青
空を眺めて、興奮した気分を静めようとする。

今日から獄房と同じ鉄棒のコーシになって、番人が外から我々を一日中監視している。
たに見える様に出来ている。
四方が部厚い壁に囲まれ、一方だけ太陽の光りが僅かばかり流れ
てくるものの、この室も鉄棒で塞いでいるため、陰鬱この上もなく、日
増しに青ざめてゆく同胞の顔色を見て、その心細さは限りない。
五十名の中僕等十五名を除き、残る大多数はガンバリ屋で、自発
的に志願して来た人達である。日本必勝を信じている結果、この
中の生活に甘んじ、更にアララトインターメントキャンプ行を希望している
ようだ。

或日、これ等強硬派の一人が「インターメントキャンプ」は軍隊式で、

全員坊主刈りだから、　我々も今日は一人残らず刈って了はう」とあって、テンエージの少年までが強制的に刈られてしまった。（かうする事が日本精神の鼓舞だと無理強ひの断行であったが）　後日アシラに着いて見ると、八百人のうち一人も坊主刈りは見あたらず、あっけにとられたものである。

移民船にのせられた日から、外界のことはさっぱり分らない。天気のよい日は太陽の光線がさし込み　その上に紺碧の空が僅かに仰がれる。廊下にはレールが何百條も敷かれていて、貨車の連結の都度地ゆれがして激しい音響を立てる。昼間はまだしも、夜、夜中でもこの激しい音響をさせて、安眠を妨げることが毎晩である。昼間はそれ等のレールのはるか向うに、自動車の走っている街が見える。真夏の太陽に照らされて、スマートな若い婦人の往き交ふ艶姿も見えて、しばし感傷的になるのであるが、何も彼も自由を束縛されて、煩悶に苦しんでいるこの頃の境遇では、美人も何もあったものではない。

ベットも便所も食事もみな広い一室の中である。ベットはなくてフロアの上にゴロ寝である。丁度乞食みたいな恰好だと思った。嘘、われ身の姿がこの上もなく憐れに思はれた。

貨車の連結の響きが轟り、あたりが静まり返る夜半、眼を窓外へやると、空には満天の星が降るばかりに輝いている。

このロルの下に打ち寄せる波音や、海千鳥の鳴く声が聞えてくる。境遇のせいか、果敢ない悲哀を感ずる

食料は軍部のさしがねで：分量が少い。毎日きまったものでさっぱり食慾をそそらないが、運動が足りないからそれで当前かも知れない。出来る丈け我々を苦しめ、今後の見せしめにする魂胆かも知らないが到って不味なものばかりである。

誰の顔を見ても、日増しに青ざめてゆくので、不気味に心細さを感ずる。我等がここにつれられてから数日後に、新らしく一人の少年が仲間入りをした。この人は悪辣なマウンテーによって、強制的にホームより引き出されて投獄され、三昼夜色々と苦しめられた。そのあげくの果、移民館に護送されて来た。と一と通りのことを話して呉れた。この人は後日アンラにて私と共に同作を始め、私のよき旧友の一人となったが、収容所の閉鎖されるまで居残り、交換船で帰国した。

寝られぬ夜中、きまったようにあのスロガンに於ける、マウンテーから言い渡された言葉が思い起こされる。~~僕~~私はその時まで世間でよく云う所謂「運命」などというものは、信じようとはしなかった。だがこの事を通して~~[illegible]~~、この現実の世界では運命が働いていることを知らしめられるようになった。私はあの時どうしてもっと冷静に考えて、最善の~~思いをマウンテーに[illegible]――――~~

今は心から打ちとけて話し合える相手とて一人もなく、フロワーの上に横になっていると、さまざまなことが頭の中に去来して来る。~~拿捕されて以来[illegible]~~特に開戦以来音信不通になっている、祖国の父母の安否である。

銘ずる。我等
ました。
出されて投獄、
仙錦に護送
ラに於て私と
鎖されるまで
テーから言い渡
ら所謂
が、この事を通
とを知らしめら
て、最善の
ウーの上に梅ん
特に
開戦

15

それでも今の自分達はどうすることも出来ない。一日も早く戦争が終り平和の日が来るのを待つより外仕方ない。なお初まったばかりの戦争、平和の日が来るのは嬉しいことであろう。

或日の夕食後に大きな包みが、移民館収容所に届けられた。夜も九時近い頃であったろうか。誰か大切に [illegible] と云うと、今までフロワーで不規則に [illegible] ところが [illegible] ていた一同が、嬉しそうに立ちあがって、その大きな包みを囲み、[illegible] れかかって一つ宛開いた [illegible] 子供のようなよろこび方である。中から山海の珍味の日本料理の御馳走が [illegible] 美味しい匂いがぷんぷんと鼻をさす。皆んな子供のように喜んだ。

うちを出てから五ヶ月ぶりに初めて戴いた日本料理。その美味しさ、嬉しさは例えようがない。うれしくて涙がぽろぽろと落ちた。今まで、かつて経験のない嬉しさである。

この篤志家は一体どなたであろうかと尋ねたところ、その頃まだ呉市に居残って居られた、「武蔵屋さん」ことミセス川本様より、[illegible] 同情が同胞 [illegible] さしいれて下さったのだと教えられた。[illegible] この戦時中にめずらしい美談。この [illegible] 武蔵屋さん、こと [illegible] 情は、戦争と共に僕の生涯忘れることの出来ない一つである。この上もない [illegible]

同行の人達と共に心から同胞へ感謝し上げる次第である。

(5) 63

NAKANO, VJO

6-4

移民館内の獄中生活に退屈を感じ、一体何時になったらアメリカへ連れるのであろうかと、毎日とりどり噂をしていたところ

八月二十八日。アメリカ・インターメント・キャンプへの移動命令が下る。

年寄では、未だ残っている婦女子が　アメリカ収容所

に今迄送られんとする我等五十名に別れを惜しみ、発車間ぎわには駆け

つけて、万歳を叫ぶどよめきの中を、ニーピー列車は静かにプラッ

トホームを離れゆく。

これから行くアメリカとは一体如何なる所か？　それは皆の一致した関心

事であるに相違ない。僕は最近ピートアワ、インターメントキャンプ

から来た[illegible]があったのを聞いていたし、キャンプ内の雰囲気はほぼ

推察していたのだが。

二、短歌　見送りの万歳声鳴る

除々に去りゆく夕闇の町、なつかしい音壮

ビル、この思出つきない吹雪坂がいよいよ遠ざかるとき、平和が訪づ

れて再び日本へ帰る時はいつであろうかと、さまざまな思いが脳裡をか

すめた。

やがて汽車は郊外へ出るにつれ急スピードに走る。日本人パイオニア

によって開拓されたフレザーバレー農園地を、[illegible]に通過

する頃は、青き灯を漏れる農家の灯、田舎の町灯がなつかし

くわが目にうつる。

心身共に疲労したせいか、変りゆく夜の車窓の眺めにも倦む。

イエイエの音を子守うたながら何時しか一睡していた。

ふと目覚めれば明け易い夏の夜は、早や東は白みかけ始める。車

窓を走る雑木林、森林の中から美しい太陽が昇る。

600

にかつてないくの
まわりうへ道
ーテが下る。
る収容所
きわけ駐け
静かなプラッ
一致した関心
メントキャンプ
方国気はほぼ
うかしい有壮
平和が訪づ
か脳裡をか
本人パイオニア
と筆に通道
わかなつかし
偲ぶ。
りある。車
ある。

米天下のフレーザー川の漫々たる流れ、蒼鬱たるロッキーの山々、あす切つたような断崖、何という雄大なる大自然の風光であろう。

車窓より数千尺の眼下に、断崖や谷をめぐつて、フレーザーの上流は激しき渕となって滔々と流れている。千古の雪をいただいたロッキーの高峯が、指呼の間に眼前にあらわれるかと思うと、切り立ったような断崖がつづく。太陽の光線にくつきりと映し出されて、絵を見るように美しく輝いている。

大平洋横断鉄道でカナダを横断する旅人が、誰しも経験するこの素晴らしい景観を、眼前に見せつけられれば、一種の云い知れぬ感動が、思わず胸中に高まるのを覚える。

しばらくすると谷間がやや開けて、牧場が見える。広々とした牧場となって、ポツン、ポツンと民家が散在しているのに気がつく。民家を囲む夏草は、既に伸び切って、やがて近づく秋を感知する。

翁と、果てしなき大平原が展開された。地平線の彼方に、黙々と浮ぶ積乱雲も美しい。一望千里とはこの景を云うのだと、広漠たる平原に一驚した。カナダが世界第二の広い国だということをつくづくみて体験した。実際戦争などどこにあるかと云った有様である。

一望千里平原州は夢心地に過ぎる。ウイヌペーグの夜の街灯が雨にうるんで美しい。既に雨に濡れし夜汽車の窓にうつる平原州の空のと共に

夜が明ければ、サスカッチワン州、どこからともなく工場の大きな汽笛が響いて来た。その瞬間私は第二の故郷であろう村が既に浮んだ。防衛地帯を撤退せし日まで、朝々聴いた工場の汽笛は、いつも私の心に限りなき希望と勇気を持たせて呉れたのであった。

今朝は今までと異った大陸性炎暑で、太陽はぎらぎらと原野

を照している。
汽車はやがて静かな町に停車した。
晩夏を誇る草花が、ステーションを囲み、今を盛りと咲き誇って
いて。遥かな白樺が車窓まで漂い、懐しき戦地の旅情をなぐさめる
黄昏より降り出した雨は、水滴となって車窓を伝う。
夜の町灯がちらほらと彼方にうるんで見える
短歌　雨に濡れし夜汽車の窓にうつりたる東満州の町のともしび

八月二十四日。　朝から空は晴れ切っていた。　次の駅が目的地「アンガラ」と、車窓よ
り聞かされてから、アンガラとは一体どんな所なのか、と
左右を見つつ好奇の目を走らす。
汽車はやがてアンガラへ着く。

アンガラ収容所。
真夏の灼熱した正午の太陽が、まばゆく今しがた汽車から降り
た我々の背を、真上から強く照りつけていた。
余りの強さに目まいをしそうである。　乾き切った大気、澄みきっ
た紺碧の空、見渡す限り目に入るものは兵営と、その周囲をかこ
む原野…………！　すべてが日、満州とは全く異った、大陸的
特有の風景を映し出していた。
我等に数倍するいかめしい兵士の銃剣に迎えられた。
敵国人であり、これから俘虜キャンプへ入れられんとする自分に、たまら

424

長い盛丘を越せしめた。

牛荷物を両手に疲れた足を引きずりつゝ、兵隊の官舎の方を通り抜け、歩行約二十分にして、いかめしい木造のゲートに辿りつく。

高さ二丈余もあらう金鋼の入口は無気味な音を立て、静かに開かれた。

こゝを一歩のれば命は向うまかせの籠の鳥になる。

短歌

人にはとりを鶏屋に追ひ込む攻め勢にて銃口向けられ獄門くぐる

又、敵国人のみじめさ転々さすらひの落付くところは捕虜キャンプあり

収容所は有刺鉄線で張りめぐらした二重の柵が囲んでいる。

いかめしいゲートをのると、案内者に導びかれホールに向ふ途中、先着の同胞八百名が居るのに先づ一驚した。八百人がみな同じ運命の下にある者と一緒になれる盛りは悪いものではない。

一様に背中に日の丸を呉れた。異様な服装に益々驚かされた。

柵に添って右側を少し歩くと、収容所の大ホールがあって我等を待っていた。ホールで真裸にされて、一人宛検査を行ひ、所持品金銭、又貴重品は全部軍部で預かった。そして最後に寝具とベットが与へられた。

時間が想像以上にかかり その頃はもう西方の山の上に夕日が傾いていた。

今日は神経を極度に使い疲労したせいか たいてい性に眠気がする。

三千哩の長途の汽車旅行に疲れ果てて今は立っている気力もなく、ぐったりと腰をベンチの上におろす。先着の多くの知人が、次々とまって握手を交し喜ばし、互に今日までの無事を喜び合った。

同じ運命の下にある者に一緒になれた喜びと共た、しかし あまり男から

ると誇って ぐとしいさめる いう。

ともしび

的地 アンゲルス

車窓から

車から降り

、澄みきつ その周囲をかこ かつた、大陸的

自分に、たまら

しくさい
自己理由でここにやって来た[illegible]の故か、彼等に会うことの恥辱の感情が同時に交錯した。
経一歌八 二首目 配給のキャンバスに組立て、捕虜キャンプの[illegible]に或かれた[illegible]一ぱいに月の光のさやかに[illegible]絞殺の目印
ベットに横になるとすぐ深い眠りに落ちてゆく。何かこわい夢を見ていた。
それが何を夢であったかはっきりしないが、場所は移民館内でおそろしい夢であった。
ふと目が覚めるとまだあたりは薄暗い。そこらを見廻すと、
監視の兵士がそばに立っていて、私の顔を見ている。
おそろしい夢におかされて、あばれな声を出していたのではあるまいか。衛兵は[illegible]気味悪るそうな顔をしたが、すぐ笑みを残して踵を返して去った。

175
80
95

アメリカに着いてからも二日、三日はまだ汽車に乗って走っている旅の感覚がして気分を統一することさえ出来なかった。
収容所は雑木林が周囲のところどころにあって、見晴しは余り遠方まで効かず、残念なことに地勢がはっきり理解出来なかった。
南方の一と所に、それも初めて木の葉がすっかり落葉した或日、視野の果に青い湖水のあることがわかった。とって置きの初夢が湖にあこがれてみた自分に展けた思いがして、[illegible]
ここは アメリカという所は、只俘虜キャンプと兵営がある丈けで、附近に何もなければ人家も附近に一軒もなさそうである。兵営があるのみに、時々大平洋横断鉄道の汽車が一日に一回位ここに止まる。
収容所の中から東方を眺めると視野は遠く開けて、晴天の日などは朝ごとに黎明を破って、朝日の登る態が見られる。夜来の雨は朝になってすっかり止んで、暑い日が射し始めキラキラと砂上を照りつけた。

この取扱手の
分かさ……
有様……が
ヌを見ていた。
錯ねておそ
過すと。
まいか。確実
おった。
いる様な案
り遠方まで
い。
修養した戦
れてる自分に
く 報告が聞
近に
何もなければ
太平洋横断
その日などは
の前は細たな

―――

21

この中の広さはさっぱり分らぬが五英加位であろうか　全部砂地で　歩けば足をとられて。足ざわりも悪い

西は兵隊の宿舎の向うに、大陸横断鉄道が南北に走っている。その向うには湖があると聞かされているが、森のために遮ぎられて残念ながらここから見られない。カモメの群が朝から終日鉄柵の中へ飛来して地上に起る戦争の無二の友となる。

北方は遥か向うの原野の中に、小さな山があって視野を限っている。南方は高い街の森があるため、一望千里と云った風景は眺望は展けない。

此所汽車の通過するを童心にかへって、見える遠い眺むるのであるが、生憎ここから線路まで二町もあろうか、官舎の家根や小高い緑にさえぎられて汽車の屋根のみしか見えないのも淋しい。

あの汽車に乗りさえすれば、三日後にはなつかしい第二の故郷ハワイへ着く。斯んな淡い、たわいない夢を画きながら、去りゆく汽車を追ひつ想念を逞しくする。

兎に角、捕虜収容所に適当した、こんな殺風景の場所をよくも見付けたものだと感心する。

鉄道と並行して国道も確にある筈であろうが、それらしいものが何処を通っているか、自動車の走っているのが見られないので、さっぱり見当がつかない。全く俗世界との接触点が見出せない。

―――

ところで収容所の中をよく見ると、二重の有刺鉄線で囲まれ、獄門を入って左側に事務所や病院があり、次に食堂がある。右側には吾徒の事務所などがあり、その次にはキャンテンや大ホールが並んでいる。

その外か八百人の住む小屋が十軒並んでいる。二軒づつ、兵舎型で整然と並んでいる
に、夜間でも行き来出来るように屋根があり、ホールがあって、
その両側には洗面場、浴場、便所等がある。

我々の住んでいる小屋は長方形で、壁はセメント、屋根はトタン張りである。雨が降ると大きな音がして賑やかである。この一つのハットに約八十名を収容していた。両側の窓の下に二十個宛ベットが並び、二段ベットであった。
ハットの両端に出入口があって、夏の間は通風もよい。二つの大きな暖炉が置かれ、冬でもこの中は寒さは感じない。又ハットの中には数脚の長いベンチが置かれてある。暖炉の周りは

夕飯を終って消灯までの数時間を、このストーブを囲んで四方山の雑談に耽るのはたのしいひとときである。ヒローシ州各地から集った人々で、色々変った日本人社会、一般の移民社会の話、今まで田舎に住み、私の知らなかったことの珍らしい話を多くきくことが出来た。
その気分は、何とも落ちつかれた寄せではあったが、暖か味を感じた。
日中は皆それぞれ仕事を分担させられる。食堂に、病院に、ストア、事務所、各ハットの掃除、風呂焚、食料品、石炭を駅から運ぶ者、ハーフウェイの外に薪炭を切りに、大工など雑役に従事する者など、凡そ八百人が生活してゆくには、それ相当の多種多用の仕事があった。

一日の日課の中できめられているもの、キャンプの内の雑役と三度の食事以外に毎朝十時に又夕方屋外に整列して人員の点呼も行はれる。コマンダーの検閲がある。

いつ、兵舎
ールがあつて、
。
根はトタン
。両側の
ん
。
ットの中に
なさは盛んでない
める
刻んで四方山
に、ピーシー州
など
まで田舎に
を感じた。
病院に
石炭を運
雑役に従事する
者の多種
毎朝十時に
点呼も行は

何時しか秋風が身にしみ、紅葉した雑木林の上を雁が飛んでゆく。これまで美しく咲き誇っていた花も、畑の野菜類も、霜に打たれて侘しさを枯れてゆき、柵の中が何となくもの淋しさを感ずる。歌。別れ住む今宵の風

有刺鉄線のもとで夕べ啼くこおろぎの声もあわれである。やがて日に日に深まって十月の声から、アラスカ特有の木枯が吹き始めた。朝の霜は兵営の屋根を白くした。初冬の吹く日は寒くなって保護キャンプには寒い北風が吹きすさんだ。日中のガラス窓かけ近寄りで蝿がぶんぶん飛んでいたが、それももう見えなくなった。

アラスカに着いてしばらくすると、体が一応落付くとともに、再び心の戦いが内面から頭をもたげて来た。これではいけない、一日も早く家族の幸福を何とか積極的に考えなければならない。同時に自分の生への意識が益々強くなって行くばかりである。命さえあれば又いつか家族と共に巡り会うこともあろう、そんな淡い希望をかけて、生気のない収容所の日々を送る。

歌。
別れ住む今宵の月は秋の風 さやかな月も鉄網(かなあみ)のぼる
空は茫々く紅葉色づくアラスカのバーブワイヤーに似き秋のふあり

この中の様子は、来る人もあとから来た者には、初めの中は分らなかったけれど、月日がたつにつれて、柵内の全般的な空気を次第に知るようになる。そしてこの中の事態が、決して平穏容易なものでないことを知った。八百人以上の者が一つの鉄柵の中で生活して行くのに平時と異なる何等かの統制が必要とされることは当然である。こう中でもな

◎

これだけ頼ることと
この収容所には各ハットに一名のハットリーダーが居り、キャンプを代表して一名のキャンプリーダーが居た。其他各部署を代表して数名が加わって、この中の総ての問題を協議し、統制していた。

道路キャンプで働く者もそうであったが、この収容所内でも寡黙な人柄が集まって居るが、大勢の中には、如何にも偉らそうな

NAKANO, VJO

6-9

所で[illegible]見つけられた

特にこの傾向が著しかったようだ。これは開戦移動次第到る所で（この収容所では）

大ものを云って、人目をひき いつも人の上に立ちたがる者が居た。[illegible]

スロカン時マウンテーに護送され 移民部へ監禁かれて以来、ここに到る（着く）までの出来事が頭の中を目まぐるしく回転する。

夜半にふと眠りより覚めた時、さまざまな想念と戦っていた。

ここに居て、いつも気になるのは正確な戦争状態を知りたいことである。

しかしニュースは殆んど（家族よりの手紙）これにのれて来ず、家族から三ヶ月ぶりに、カラへ来てから初めて便りを受取った。電報を開いた瞬間 かなしくて嬉しくて涙が落ちた。

ハサミで一字一字チョン切っているために せっかく妻から家族の安否を知らせて来た 私にとっては最も重要な書簡であるのに ちんぷん、かんぷん [illegible] 切抜き方が[illegible]意味が通じない。妻から夫に出した手紙のもの。[illegible]で節まで残酷にしなくても、よさそうなものだと腹立たしくならなかった。

日英両文を解する者が、このキャンプ内でセンサーに当っていると いうが。まさか日本人ではあるまいと思う。

センサされし[illegible]の手紙あみの目の如く切り捨てられて判読に苦しむ。

我々は常に情報に飢えていたので、ややもすると飛んでもないデマが飛んだ。そのデマを正直に信ずる者が多いようであった。

キャンプ内の教導部の発表するニュースを聞くのがたのしみであったが、いつのニュースも「日本軍の損害僅少、敵に多大の損

NAKANO, VJO

6-4

収容所では
以来到る
着く
これ到る
りん。
いことである。
けぶりの、アン
なしくて悼ろり
家族の安否
ちんぷん、
味が通じ
残酷にし
に苦しむ。
分っていると
もないデマが
った。
しみであっ
隣に多大の損

害を与へた」と報げた。永をどこまで信じてよいか迷はされた。

暁の静寂を破って鳴り渡る喇叭と共に起床。自分のベッドのメークベッドをする時、十時からコマンダーの検閲がある。

朝食の喇叭と共に食堂に押し寄せ、列を作って配給の順を待つ。毎日が型にはまったような単調さの連続である。

一皿の食物とプレート一枚にお茶。限られた量でいつも腹七分、このキャンプへ来て朝食の時、いつも思い出すのは、あの美味しい味噌汁の味である。

剰え、生木を二つにさくが如く家族と別居させられ、山河幾千里離れたピンシー州のゴーストタウンに[illegible]妻子に、万一のことがあってもすぐ飛んで行けず、[illegible]現在の境遇を思ふ時、寂寥とした眠れぬ夜を過ごすこと幾度あったか知れない。[illegible]

朝食が済んで屋外へ出ると、全視界が目の前に展ける。包囲する原野は、まだ静まりかへって朝の大気の中に眠っている。東方の木立から鳥の囀りが聞えてくる。カモメの群は朝早くから収容所の空を飛翔している。その他何一つもの音もしない。[illegible]夕焼けは素晴らしいオレンジ色のアカシアの原色の朝焼、原野の果てる地平線は[illegible]。[illegible]

やがて輝く朝日を浴びながら、朝のしじまを破って、掛声も勇ましく号令のラジオ体操が始まった。日の丸の御旗を背に、朝日にかがやいている[illegible]に揃いのシャツに手脚の動きも威よく揃って[illegible]。

老人達は如何にも嬉しそうに、にこにこと、これを眺めている。
それが終ると、あたりは再びもとの静けさにかへる。朝は底石に冷気を感ずるが、太陽が昇るとともに、すぐ暖い気温となる。附近一帯の曠野は各種雑多な落葉樹や、つたかずらの葉が真紅に紅葉して秋を彩っている。所々に常盤樹がそれらを点綴して殊に美しい。

短歌二首

ここに来てから間もなく、中野一海節氏によって詩歌に趣味を持つ者同志が相集り俳句会、短歌会が創立された。孤独なキャンプ生活の不満が反映して多くの青年が集り、句吟に余念がなかった。境遇が反映して主観的なよい句が詠まれた。
或日この句会の中の一青年が、盲腸炎にかかり切開手術をした。今から思ふと盲腸炎のオプレーションは位地、命を失った事をきいたことがないのに、この青年は、兵営の軍医によって手術をうけ、結果が悪く 可愛想に帰えらぬ旅の人となった。
隣のバラックに、かって晩市で開業していた一人の日本人ドクトルが居たが、このドクトルは話しの序に「私をオプレーションに立会させてくれたら、料理ナイフ一本あったら大丈夫手術が出来たのであるが」と、もらしていたが、この青年が不幸にして死亡されたことを聞いて軍部に対して激昂して居た。
収容所で死亡した者は不幸である。取り止める命でもこれはすべてが不完全なために死亡する。

来り

は病床に姿勢

なる。附近

の若が真

それらを点綴

ふ相当俳

句吟に余。

れ

り切開手術

が命を失った

臨田によって

の人となった。

人つトクトンが

ーミヨレに立会

派に手術が

不手際って死亡

止める命でも

27

それまで新争の悲惨さについては何回となく耳にし触れて来たのであるが、自分に関係のあった旬友の死は格別身に沁みた。

毎日くり返す不安な生活。この状態から一刻も早く何とかしなくてはならない。情報によれば脱出したら切りなするわあらうか、さんな事を思ったこともある。然しそんなことも出来ない。

自分が心においてこのような苦闘をしているのに、他の自分と同じ境遇の者たちが、何故か比較的のん切りと見え、ここの現状に順応しているかの如く見えたのが不思議でならない。またうらやましくさえあった。

来る日も来る日もこの不愉快さ、ただ、どうせここに永久にいるのではない。やがては何処かに移されるに相違ない。或いは戦勝の日本へ交換船で送還されるかも知れない。一寸先は解らないが、私はその日の一日も早く来るのを待った。

オランダ印刷・アンボン諸島の酋長の部族はすばらしく恵外の果に昇る地は私を往来させた、戎夜が死に帰る迄一子を宣誓して貰ったから 私はこの大陸性自然美の雄大さに感動されて四方の風光を眺めて余興を失った。不安な日々にはからしてその記憶を見せてくれた運命に感謝した。

待ちわびれの或日赤十字社代表の、スイス国領事より捕虜交換船でこの戦時中に、帰国したい向きは申出るようにと発表された。その頃は戦争は日本が勝つと信じ切っていた私は、自らの勝利を全面的に信じ一も二もなく帰国を申込んだ。

その頃、政府は[illegible]政策を強行するため、ゴーストタウン・晩市、ホープなどに居残っている日系人達に対して「東部へ移転するか、それとも日本への引揚げるか、二つに一つを決めるように」と要求された。

時多くの日系人は未知の東部、寒さ厳しい東部に移住するより、いっそ思い切ってなつかしい日本へ帰えろうと、引揚げを申告した者が多数居たようである。

NAKANO, VJO
6-9

私達の居るアクモラという所は、捕虜キャンプがあるだけで、原野の中のように思われる。兵営の南側を東から西へ大陸横断鉄道が通っている。駅といっても名ばかりの小屋である。

南方は盛り上った森の青葉で視界をさえぎり、その上に晴れた日は青空が見える。東、西、北、三方が起伏のある原野で、低い雑木が一面に密生している。

所々に直径一尺位のへムなどの若木がある。或日硝兵監視の下に、パーフヤの枝の黒松の古木を、ストーブの薪にするため切りとったことがある。その時足元の草かげから、一匹の白兎が飛び出してびっくりさせられた。雑木の中には湿気があって、小さな溝が到る所にある。水溜りには空を流るる白雲を映して青空を映しているが、ときには魚の泳ぐ姿が

ちょうど と読んで来て故郷の幼女の噂を思い出す

収容所の中にはいつもカモメの群が居て、孤独な我等を慰めてくれる。どこを見ても湖らしいものが視野の中に見えないのに、カモメの居ることが不思議でならない。秋も深まって日増しに木の葉が落ちそめた或日、南方の丘にまつ青な湖水を見付けた時、砂漠の中でオアシスを見付けたように、殺風景な収容所からの眺望も開けて嬉しかった。

やがてこの地で迎える第一回のクリスマスが近づいた。クリスマスと云っても永年住み馴れていた村では、雪のないクリスマスもあったが、アク

・原野の
横断鉄道
その上に晴れ
伏のある原
硝兵監視の
りつたことがあ
をしてひっつく
海が到る所
には白鳥の姿が
も見える原。
を慰めさめて
えないのに。
て日曜日に来の
を見付け大洲、
は収容所から
スマスと云っても
あったが、アラク

ラは岩石に寒さは厳しく、10月頃から雪は何回も降った。見渡す限り一面雪に蔽はれた白一色の銀世界である。本当にクリスマス気分が漂った。ウ村では毎年クリスマスが催され、クリスマス祝賀会を盛大に催し、余興には忠臣蔵などの旧劇を演じて、村民を大いに喜ばせ、お祭り気分をいやが上にも盛りあげた。

あのクリスマスの日の光景が、今思い出となりウ村がたまらなく懐かしい。

戦争が終り、平和のあかつき、再びあの平和で住心地のよかったウ村にいつ頃訪れることであろうか。なつかしき思い出が次々と脳裡を走馬灯のように走る。

やがて収容所に合が読まれた

アラクラの文字は言語に絶した寒さである。鉄柵の外をくろぐろと柵の中のライオンのように、運動のために一日に何十回とめぐっていた夏が秋が（に）かけての頃がなつかしい。

この頃は外は酷寒のために大体は室内で読書に耽るのであるが、長くつづけば、それにも倦き退屈する。たまにはストーブを囲み雑談に耽っている仲間の仲間入りをする。

その頃の様に室内で退屈する日が多くなると、タイムが充分あり余るので再び聖書をよみ始めることにした。

自分の持っている聖書は、新旧訳聖書で部厚いものである。ウ村に居た頃友人に励められて日本から聖書を取寄せ時々目を通していたが読み終へてなかった。

それから二十年近くにもなるので、今度こそ終りまで読み通してやろうと決心した。読んだ個所をすっかり忘れてある。初めは探求心も手伝って、はげしい意気の勢で読み出したものの、終りに近づく頃には少々飽きが来てあり、同時に不可解な所が多くなり、再び聖書から遠ざかった月日

327

NAKANO, VJO　　6-9

学ぶのだ。そしてすぐ自分の好きな、文学によめる短歌の本に目を向けようとする。その時私は、キリスト教というものが、自分でバイブルを読んだ丈けで、理解し得るには余り六つかしいものに思えた。

私は敗戦後、ハロアニウラの捕虜キャンプへ入れられてから、生まれて初めて生きて来た世の中を何回となく振り返えさせられた。果して人間は何のために生きているのか、どこに人生の基盤をおいてよいのか、何が人間の世渡りに最高の価値なのか。深い懐疑をいだいた。何故かくも窮極のことを真剣に考えさせられたか、要は、日々孤独のどん底に落とされた生活に呻吟していたからである。そして永遠なるものを暗中模索した。その最後に、それは聖書が示していることを確信した。

589

クリスマスの戦后の夕餉の食卓に、ケーキやクッキーなどが配布されてあった。今晩はめったに食卓につかない主任の信国氏が、らしいものがテーブルの上にあるのを不審に思い、司厨部[illegible]に聞いたら、くわしく説明があった。ケーキについては、このクリスマス・プレゼントは、クリレウット・カズロの同胞より、キャンプ内日系人一同へ贈って下さったことが判明した。

キリスト教に疎い私は、この時特にクリスマスというものを身近かに感じた。またこのことによって、カズロ並びにクリレウットの同胞に心から感謝の念がこみあげて来て、思わず涙を伝わすものを覚えた。まだ見たこともない、二ヶ所のゴーストタウンに在住する皆様の美しい生活の中から湧きいでた美しい隣人愛

今九目を向け
ルを読んだ丈
何回となく
人生の基盤
い懐疑をいだ
のは、日々孤独
今晩はめずら 部[illegible]の信[illegible]
ト・カズロの
に近かれ感じた。
感謝の念が
見たこともない
[illegible]

を心に画きながら、主エス・キリストにある時、我々はお互に山河幾千里を隔てゝ越えて なほ一つの兄弟姉妹である実感が迫った。

不自由な日常の生活をつゞけてゐる捕虜キャンプの人々に せめてこのクリスマスを味はせようというコーストタウンの皆様の好意なのか 本当に有難く感謝に堪えない。この如何ならば楽しかるべきクリスマスも 捕虜という心の底の痛みや さみしい苦悩の故に 少しも心は浮かない、魂に救いがやさしき暗雲はどうしても除かれなかった。

今日は一九四二年十二月二十四日。クリスマスの前夜である。夜になると金網の外の軍隊の建物からは賑やかな合唱の声が聞えて来る。何の歌を唄っているのかはっきり分らないが、我等は中々[illegible]のに、兵営の方では別天地のように騒がしい。金網一つを境界にして、不自由な人間の世界と、自由な人間の世界の存在することが、妙に対照的にはっきりと意識された。

然しこのキャンプ内ではふだんの日で何等変ることなく淋しい終日である。兵営では喧嘩[illegible]まして賑やかで、歌声が絶えず聞える。これが交戦国のクリスマス風景といったものなのか、何か我々には鉄柵の内では[illegible]は、手段[illegible]

明ればクリスマスである。夕飼は[illegible]のクリスマス・ディナーらしいものを戴いた。

それにひきかえ思い当るものがある。

七対玖[illegible]は、入口より一歩も出られない。苦し規定を破って一歩でも外に出ようものなら、高見櫓の哨兵から注意の暗号が発せられる。それでもきかない場合には機関銃で射殺されても仕方がない。

収容所を囲む二重の有刺鉄線の所々に一万燭光の電灯が煌々と昼をあざむくばかりの明るさである。夜間鼠一匹這っても分る。針が落ちても分ると誰かが云ったが それ程明るい

その有刺鉄線の所々に高台があり、機関銃が据えてあって、衛兵が昼夜交代で見張りをやっている。猫の前に置かれた鼠のように、僕は常に機関銃を向けられている。これは細かい人々が常在意識となって、ここに居る毎日が妙にうっとうしい気がするか、僕だけであろうか。

昨夜は少々寒しかったなと思ふと〇下二十度であった。晴れ渡った空を飛機が一つ頭上を横切る。どこから来てどこへ行くのか、只頭の中で想像をたくましくするだけである。クリスマスを経へると、もうすぐ新年である。

[illegible]

今日は一九四二年一月一日である。今朝は今までかって味はった事のない特異な元朝をこのキャンプで迎へるのである。東方の黎明を破って登る初日を両手を合せて遥かに拝んだ。同時に愛する祖国のため、又永らく音信不通の父母のため祈った。新鮮な朝の空気を思う存分呼吸し、涯しない青空と、紺碧の湖を眺めながら、この境遇に涙さえ浮んだ。去年の元朝と比較して余りにも変り果てた[illegible]

ここへ来て最早五ヶ月も過ぎたが、ここがどんな所か、周囲の地勢がさっぱり見当がつかない。柵内に回覧されるものは大体戦況ニュースであって、ここの地勢などは知るよしもない。只朝夕四方の風景（いや大自然）、気候の変遷を注意深く眺め、朝日の昇る東天、夕陽の沈む西、それに南北、金網越しに眺める

…んであつて、様

を向けられている
これは細かい
僕

からまつてそこ
である。

…はつきり事のま、
…るのである
遠くに拝んだ。
め祈つた。
金と、紺碧の
は変り果てた
愛め解かない

周囲の地勢
ここの地勢など
遠く眺め、朝日の
鑑越しに眺める

小さな範囲に於て詩情のあらん限りを燃し尽くしてゐた。

生涯この中に居る訳でもなし、いつの日か自由の世界へ開放される日がめぐり来るであろうが、その時は、この狭い収容所で、毎日あらゆる面で不自由を忍び、人間として最低、最少限度をそれで甘んじて来たことが、考へようによつて今後のために良き試練となるのではあるまいか。こんな他愛もない事を考へながら 昨夜は眠りに落ちていた。

勇ましい起床喇叭に起き上り、メークベッドして洗面をなし食堂に行かんと一歩戸口を出ると、今までになかった酷寒である。耳と鼻の先がピリーと針でさされるように応えて来る。その朝は0下四十度であった。うかつにしていたら凍傷して、大変な目に会うところを、友人に注意されて難を免かれた。

この頃赤十字社の代表とスイス領事の尽力で 収容所の中で映画を見せて頂けるようになった。兵隊のために映写したあと、日本人にも見せてくれるというのである。

もう二十数年も前の事で、はっきり覚えていないが、最初はカナダ紀行映画で、ニュースも上映された。開戦以来の久し振りに見る映画で、心に人間らしい世界に追い出されたような雰囲気に浸る。

130

5

ロッキー山の景勝とか山林、農業、牧畜、漁業、あらゆる分野に亘るカナダの紹介であった。最後に、テフシーンの映画も見せてくれたが、かのテフシーン方と云ったら彼女ようがない。もしも これが収容所でなかったら、どんなに家も晴々として楽しく見られた事であろうか。「しかしお前は妻や愛しい子の事を忘れているのか」。この思いが一瞬にしてすべてを元の暗黒につき戻してしまう。今の自分の境遇では、所詮うれしい時も涙、悲しい時も涙、淋しい時も涙、斯うも弱々しい自分になったものかと、つくづく我が身にあきれた。

今日も亦この中独特のニュースを写した。大平洋の戦局はサイパン、テニアン、ガアムで激戦が行われ、九月には日本基地パラオが攻撃をうけた。十月になってから米機動部隊と沖縄、台湾ルソンで戦を交えている。そして十月にマッカーサー将軍を両度の激戦をフィリッピンのレイテ島にて日本軍は交戦している。この時も日本軍は大いなる戦果をあげたと報道された。

こうした激しい世界の移り変りをよそに、我々は今日もたのしい俳句会を開催した。先週募集した課題「天の川」が梅節一宗匠より発表された。一同は自分の句が入選しているかどうかと片唾を呑んで待ちもうけている。選者より一句一句批評が有、せんさくの意味を説明しながら最後に作者名の発表があった。大方の者が初心者のようであるが皆熱心に勉強するのでめきめき

ゆる分野
音々ら
附の本格調
ねのしく見られ
ぬれているのか」
しまう。
れ涙、勝い
我が身れた
戦局はサイ
全地へ。ラオが、
沖縄、台湾
ァと四度の
いる。この時
ハ々は今日も
「天の川」が
していかどう
句批評があ
うめでめく

上達した。次の課題は、明治節（辛日で〆切り）一週間毎にまた句会を催すことに決めて発会した。この句会は日増しに盛会を極め、アララギが閉鎖され、ムーランルージュに移り、その後はそこが閉鎖されて許可の者が日本へ送還されるまで続いた。句会創立当時（次第）よりキャンプ閉鎖されるまでの多くの作者の代表的秀句を集めて共同句集「鉄柵」を編集した。多くの句友の多年に亘る句吟のあとを世に残し、抑留中アララギ収容所の記念すべき詩生活の歴史を後世に残した。

娯楽方面では将棋をさす者、碁、トランプなどがあった。生きる自由を奪われ、前途に希望のない青少年達は所詮刹那的、享楽的、頽廃的に傾けはしないかと懸念させられた。人間の本能として致し方ないことではある。然しまだ若い将来を持つ純真なるべき青少年が、精神的に失意の日々を送る姿は悲しむべきことであると思われる。

一九四二年三月以来転々として移り変り、心の落つく暇もなかつたが。
最后の場所まで来たので、これ以上言い所はないのだから、これで
腰がすわる。戦争がいつ終るかといふことは　誰しも関心事で
あつたに相違ないが ーーーーーー

戦争がどう変つてゆくか、まだ全く未知数である。　時々この
中では井の中の蛙で、無鉄砲に外界の事がさっぱり解らなく日本の勝利を
信じ切つて居た。　交換船で何時なつかしい祖国へ迎えられるか、その日
を待ち望んで居た。　日本の勝利を信じつゝ。　十六ヶ月も固い狭い柵
の中で、　オリの中の熊のように　詰めこめられて暮したのである。
時間自由を束縛されて人知れぬ不自由を感じたが、或る意味では、却って人
間として得難い人生の貴重な体験であつた。　ここでなければ
味はへない、特権な体験でもあつた。却つて私の修養の時でもあつた。
こんな心配もないことを考へながら、昨夜は眠りにおちて了った
話。「今に見ろ戦勝のあかつきは」とカエルが井の中の蛙大海を知らずのごとき
檻の中の熊のごとくに柵の中を往きつ戻りつ
その他といえば多くのタイムを読書に費やす。

収容所の中に一人の立派な青年ピアニストが居た。　或日友人の
せ話でこの青年紳士より私はピアノの教授をうけることになつた。
これで私にとって一つのたのしい日課が増えて何より嬉しかつた。
年齢のせいか　指が固くて仲々思うように動かない、　それでも、この
紳士は親切に私の手をとるようにして　指導して下さったので段
々上達した。　到々本調子に「荒城の月」をペースアップで立派に
弾くようになつた。　これはトロントへ出た時に家族に対する
私からのよきお土産だと思つた。　立派なピアノがホールに一台あ
つて、ふだんは誰も弾く者がいないので　いつでも遠慮なし
に使へた。

これは大変楽しみで、ひまな時間もうつめられ、　真実な世界
の動きと諸交渉のため空白になつてゆく頭が少し救われた。

307

320

もなかったが、
から、それで
関心事で
。
特にこの
・勝を
れるか、その日
同には狭い柵
・
或る意味では、
却って人
でなければ
もあった。
れた
大応を知らされき

或日友人の
ことになった。
かった。
それでも。この
下さったので役
人の中で立派に
かれに対する
ルに一臺ある
遠慮なし
具実な世界
、われた。

収容所の中にキャンティーンが設けられていた。労働に預けてある自分の金を月一回、自分の必要額をキューポンに替え、チョコレート、ガム、アップル、其の他ちょっとした日用品を求められるようになっていた。

春もいよいよ盛りの頃、暖い陽光の下で、さまざまな草花が日増しに大きく伸びてゆく。今年は野菜畑が去年よりも面積も拡げられて老人が種子を播き、一生懸命に手入の甲斐あって、色々な野菜がよく成長しつつある。やがて我々の食卓を飾り一同をよろこばせる事であろう。

外界と全く隔絶されたこの収容所では、毎日別世界が繰り拡げられた。

それに比べて外ではヨーロッパの戦線、太平洋の海、南洋の島々に、今日も激しい死闘が繰返されているであろう。明日は又このキャンプ内の報道部によって、ある一週間の戦況の報道がなされる筈で、それをたのしみにしている。ここを出所したあとで分った事であるが、この中の報道が正確を欠いでいたようである。でもその報道を鵜呑みにしていたことを思うと、保護というもの、みじめさ、哀れさがひしひしと胸に迫って来る。

132

39

インターメントキャンプへつれられた当時は、気も変になりそうな、混乱した生活は日がたつにつれて段々落着き、今までのように気をくしゃくしゃさせたところでどうなろう。この中につれられた以上は籠の鳥と同様だ。どうする事も出来ない。そんな事よりも手伝って、気分を除々に取りなほすことに努力めた。

青少年の体育向上の為に柔道、撃剣などの練習が毎日盛んに行なわれている。青少年皆に精神を鼓吹させるために僕は蔭ながら収容所では大変有意義なことであると信じ、それら僕らの指導者に敬意の念を抱いていた。僕も今少し若かったらそれに参加して稽古だけでもしたいと思った程であった。しかしその読書、作歌、俳句などに多くの時間を費やすことが出来た。特に短歌では、啄木全集を友人より借用出来たことは嬉しい限りであった。

僕はこうした収容所という情況の下ではあらゆる面で束縛されていたが、読書だけは数千字の努力によってかつての日本文庫の書籍を読み出して頂いたので、どの方面の本でも自分の希望によって、自由に読むことが出来た。おしいことはもっと尽力をかけたらといった悔いが今でもないでもない。

いつ終るか戦争終結の見通しがつかない。そこでこの頃どうし
たら最も愉快に有意義な収容所の日々を過ごせるか、といった
人間の本能的感情に支配されていった。

又多くの青年は暇潰し（ヒマ）に、板細工を始めた。小切れの板でフレー
ムなど、そのほかさまざまなものを造っていたようだ。その頃造ったものを
今でも保存している人が相当あるようだが、それらの品は戦時
中保護収容所生活のよき思い出となる遺品である。
私も親しい青年から、一つ頂いたものを収容所を出る折、大切
にしてカバンの底にのせて来た。そのフレームを今もなお、ルーム
の壁に飾ってあるが、このフレームは無言のままに、常に厳粛に
何かを語りかけてくれる。
記念の品というものはよいものである。

原稿用紙に40枚

合計 11950—B
9197—A
合計＝21147
695
21452
860
20592

119

Book
① —13700
② 9900
~~24??~~
23600

約
30000字

7ページ2行の14行に左記を入れること

ロッキーの高原地帯で今まで見たこともないさまざまの花が咲き乱れていた。一條流れる清流の堤
式日友人K氏と野原に
散歩を歩いた。花の名を
足もとのめづらしい花を一つ一つ摘みながら
友に尋ね一々手帳につけた。それらの花の名も
六十五年後の今日 テニインキャンプ生活の思出のよすが
となって 老いかけた僕の胸に何かを暗示して呉れる。
あれから六月に掛けてあの長閑な ジャスパーの国立
公園の近く窓を鑿、全く野花に熱中して暮した。
新緑を過ぎた日の光りが洪水のやうに附近に張り流
れた。
僕はその当時寄宿で窓を浴びながら彼女に送るよ
手紙を書いた。その中に即吟の短歌も書き添えた。
あはその後まだ知らない遠い都会の中にふるさとのお庭に咲いた スイートピーや
その他可憐な花の押花が送って来た。
手紙の終りに近況の首が書いてあったりした。
六月になると刈場の岸の猫柳も散って、たんぽぽは到る所に満開
となり。水たまりや川の岸から蛙がしきりに鳴き
たてる。
今日は雨が降っては晴れ晴れては又降った。
四ついたあよりの便が届いた。
今宵は青空に月があかるい。私は静かに立上って川の岸
をおりた。そして水の中まで辿って河下の方へ歩いた。月
は冴えている。ロッキーの峯が凄まじい影を水に映してゐ
る。澄んで流る、あたりは鏡の如く、瀬を立て流る
、床は月光砕けてきらきら輝いている。私は夢
心地になって、そぞろ流れの岸を歩いた。遠く川下
を眺むれば、月の色は限りなく冴え、川霧立つ、夢の
如く淡く水面に浮かんでゐる。流れのまにまにものうらしい
呼声がある。

8 4ページ20行の次に入れること。
ロッキー山麓の夜は涼しかった。日の暮れ方雲の去る方に立って、しイ空をめぐる遠い山々
や近くにそゝり立つ峯々の高くなるのを眺めておると、身も心も引きつけられるやうな
気持がされると共に心を誘ひってくる。哀れとでもいふことか静かと思はされた。
つまらぬ執着がおしっ消えたもの。色々なことが次々浮んで来て倒の七十人程
安感情が烈しく胸に迫って来て、涙がぽつりと押すやうに出てくる。
遠い故郷や谷は名残なく分れても遠い此の谷の頃は早く明るかった。いなって
話すことも少くなった、寂しさに降り来て 其の声が浸みしたやうに寂しくひろがって行った。
故郷の旅へが有る泉が甘い涙を誘った。
暫かぬ山に落ちたのだ。

TELEPHONE: 362-5002

THOMAS T. ONIZUKA
BARRISTER, SOLICITOR AND NOTARY
221 VICTORIA STREET
TORONTO 2, ONT.

July 11th, 1966.

Ham	- 65
Loin	- 63
Pork Chops	- 75
Butt	- 55
Picnics	- 49
Back Ribs - Fresh	- 97
Side Ribs - Fresh	- 63
Tenderloins - Fresh	- 1.03
B'less Backs	- 79
Hocks	- 29
Trimmings	- 65
Feet	- 15
Back Fat	- 21

FANCY MEATS

Beef Liver	- 49
Beef Kidney	- 41
Ox Tongue	- 49
Pork Heart	- 41
Beef Heart	- 43
Pork Liver	- 39
Calf Liver	- 1.15
S.P. Ox Tongue	- 59
Lamb Liver	- 53

SMOKED MEATS
HAMS

M.L. Ham Reg.	- 65
M.L. Ham RTS PS	- 69
M.L. Ham RTS Bls.	- 99
M.L. Ham RTS ½ Bone-In	- 87

M.L. Sausage Tray 1's	- 65
Jubilee Sausage Tray 1's	- 57
Sausage Farmer	- 63
Skinless Sausage	- 57
Salami	- 77
Polish Sausage	- 79
Black Pudding	- 49
M.L. Wieners Cello 1's	- 55
M.L. All Beef Wieners	- 51
Kolbassa	- 85
Bologna	- 39

6 oz. Per Package

Mac & Cheese	- 29
Mock Chicken	- 29
Dutch Loaf	- 29
Cooked Ham	- 63

PRODUCE

M.L. Butter	- 65
Eggs 'A' Extra Large	- 55
Loaf Cheese 2's	- 1.29
Old Cheese	- 79
Jubilee Old 5's	- 87
M.L. Cheese Sliced ½'s	- 37
M.L. Ched-R-Spred	- Spec.
M.L. Ched-R-Spred Cheese Wedges Mild 12 oz.	- 59
" Med. 12 oz.	- 63
" Old 12 oz.	- 67

M.L. Pate de Foie 3 oz. Tin	- [illegible]
M.L. Beef Pork & Chix 3 oz.	- 19

*BROKEN STOCK

Cooked Ham Layers	- 91
Bologna	- 27
Wieners	- 33

PEANUT BUTTER

3 lb. Pails	- 1.19
16 oz. Jar	- 49

SOAP

York Flakes 25 lbs.	- 6.79
Laundrex 25 lbs.	- Spec.
Dial - Bath Size 2 for	- Spec.
Dial - Regular 2 for	- Spec.
M.L. Liquid Detergent 24 oz.	- 69
M.L. Flakes 28 oz.	- 89

NUTS

Blanched 13 oz. (tins)	- 61
Cashews 13 oz. (tins)	- 99
Mixed Nuts 13 oz. (tins)	- 93

JAM

York Strawberry Jam 1½ lb. Tin	- 69
York Raspberry Jam 1½ lb. Tin	- 69

Courtesy of Mrs. Ujo Nakano

F. 107

VANCOUVER
FEB 25
7 PM
1932
BRITISH COLUMBIA

J. [illegible], Esq.,

c/o [illegible] Tsujimura, Esq.,

[illegible] Powell St.,

Vancouver, B. C.

DEPARTMENT OF
MARINE AND FISHERIES
FISHERY SERVICE.

Vol Ⅱ 中野雨情手記

10
~~[illegible]~~
字
~~7350~~
字

9697
500
9197
710
~~8487~~

11194

第二巻

① 1.

362字

一九四二年三月以来転々として移り変り、心の落ちつく暇もなかったが、
最悪の場所まで来た訳だ。之以上悪い所はあるまい。こう思うとこ
れで少し腹もすわる。戦争がいつ終るかということは、誰しもの関
心事であったに相違ないが……
戦争がどう変ってゆくか。また全く未知数である。特に

収容所の生活はただ「単調」の一語につきると思う。如何にして
時間を過ごそうかということに苦心する。自分のやりたいと思うことが出来
ない。外の世界はあわただしく変化しつつある。その激動する現実
の世界から全く隔離されたこの小さな柵の中にあっては、頭は次第にボケ
ルような気がする。

この中では戦争がいつまでつづくか、いろいろのニュースにまどはされて、
いづれを信じてよいか解らず[illegible]。こんな時に、世界の動きが
如何になりゆくとも、少しも迷うことなく、毎日毎日を大地にしっかと足を
踏みつけて、確実に歩みつづけ得る信仰が欲しかった。
しかしながら気が向いた時だけ聖書を読む位では、私の信仰は少しも
進まない。自由を束縛されて、且つ孤独と闘っている私達のために
せめて一週に一回でも牧師の伝道が。この中で行なわれたら多くの
人がどんなによろこんで求道したことであろう。

一九四三年の秋

晩秋の或日窓外は、砂土の上にしとしと氷雨が降っている。ベットの上に横になって、夜にかけて止みそうもなく降りつゞく氷雨を眺めていると、自分と家のことに思い至った。自分は第二次大戦中二つの大きな転回を経験した。すなはち、その一つは、意外に捕虜キャンプへ抑留収容されたことであり、他の一つは、聖書に近づいたことである。このいづれも開戦当時は夢想だにしなかったことで、考へるとたゞ運命と云へば運命のようにも思はれるし、不思議といふ他はない。

509字

赤十字社代表の尽力で、晩市日本文庫の書籍がキャンプへ送られて来た。ニュースや読物に不自由勝ちな我々に日本語の書物がよめるようになって皆んな大喜びである。何といっても日本人は矢張り日本語の書籍が有難い。読書に飢えた我々が、これによって精神的に大いにうるおされることは当然である。毎日読書子が室一ぱい詰かけている盛況である。各方面に亘る多くの書籍の中から自分の好きな万葉集、太田水穂、石川啄木などの歌集を見付けた。嬉しくて何回となく繰り返しよむ。清新な趣味に溢れた人の様に熱心に読んだ。そこで啄木の歌集は青年歌人だけに好感が持てて、何回も繰返しよんだ。

だが悲しいことは、ここに居る間、井の中の蛙で世界の情勢を正確に知る事が出来ないことである。

…字

…ばっている。
…語りつづく
…した。
…出されたこ
つた。
へるとただ

…ンプへ送られ
よめるように
…張り日米
…それによって
…書子が…かけてある
集、大曲水
て何回となく
…を読んだ
何回も繰返し
の情勢を

3

（生）

収容所内で報道されるニュースは、みな軍部の検閲済みのものに限られていると言っていい。英文紙を日本語に訳したものを報道する。だが、大体の場合、どのニュースも日本軍の連戦連勝である。

従って、この中のガンバリ屋は、又も日本軍の大勝だときいてあたり前の如く、皇軍の前途は[illegible]と言って有頂天になっておる。

一九四三年　月

一九四二年の八月　日。咲多[illegible]移民館の獄舎から、このアンゴラ収容所へ送られて来て早や十ケ月の月日は流れ去った。

一口に十ケ月と云ふと短いようだが捕虜収容所での十ケ月は、かつて経験したことのない全く特異なものである。

この間世界の情勢は大きく変転した。個人にとっても、予想しなかった収容所の苦難をなめ、そのことのために精神的耐え難い苦しい経験を毎日なめた。

その苦しみは到底筆には書きあらわす事は出来ない程おいつめられる。遂にその苦難の果に聖書を開く身となり、エスキリストの福音に接し、主のみ言葉によって苦難に打ち勝ちたいと願った。

ここへ来て十ケ月の月日は過ぎ去った。忘れ得ない三月十六日。忘れ得ない三月十六日。大陸の流れ、ことの早さにうちたたかれ驚く。

十ケ月前のクリスマス――出来る。

ジャスパー（ロッキー山麓の）の道路キャンプ。スロカン（ゴースト）

（タウン）での出来事のために呉市移民館への護送。移民館より、カナダ太平洋横断鉄道にて　オンタリオ州　アングラス谷部へと、全く予期せざりし捕虜同様の運命ーーーーーー　こうした一聯の出来事が昨日のことのように、心のうちにまざまざと甦る。　死んだ旬友のことがしきりに想い起こされる。

401字

運命とはいへ、この十ヶ月間に想像も出来なかった曲折した道をたどって来た事か。　妻や子を山河幾千里の彼方に置き、家庭が互に別れ別れに生活している現状であるが、斯んな生活が果してこのまま続けていいものであるかどうか。　きびしい自己批判の台上にさらされる。

この頃何だか自分の心が行きつまった様な気がする。昨夜うつらうつらうつらうつらして仲々眠られなかった。今朝春光燦々たる柵の中を一人とぼとぼと歩きながら考へ込んだ。その時ふと頭に浮んだ事があった。それは[illegible]聖書の話[illegible]ウットファイバーで共に働いていた友人に勧められて日本より取寄せた旧訳聖書一冊の事である。そうだ。タイムが充分あるうちに、こんなチャンスは又とあるまい。早速読み始めた。

401字

道。

川――アンゲラ

運命――

のことのよ

の友のことが

した道をた

き、家庭が

な生活が果

自己批判の

る。昨夜

てたる柵の中

を読み済ん

友人に勧め

める。

ハは又となう

K、といふ熱心なクリスチャンホームから村に居を構へ

K君から村に三、六十年も居るであらうか。その間彼に導かれて

聖書と讃美歌を携えて、周末にクリスチャン家庭を訪問して

家庭集会が催された。集ふ者は六人であつたが誠に温か味のある集ひであつた。主の祈をささげ、

聖書の講議をきき、讃美歌の歌い方を習い

生れて初めて聖書の言葉や讃美歌に触れることが出来た。

僕は何か精神的に異様な感激に打たれた。

そしてこの殺風景なキャンプ生活に何か尊い潤ほいを感じさせられて

神に感謝した。ともかくこの家庭集会は一ゴロつきの横やりで

僕が…みて…やれなくなつた。

不―

春のうららかな日曜日に、バイブルと讃美歌を携えて K君と工場の水源地へ登つた。約一時間で水源地へ辿り着く。

かなたの山上よりパルプ工場を見おろすと、蜿々として長蛇の如くパイプラインがこの水源地より工場へと走つている。紺碧の

ハウサウンド海を隔てて対岸のブリタニヤ銅山、同地に就働している同胞のキャンプや船着き場がなつかしく見える。

東方に目を転ずると、スカミシ方面の山頂にはまだ深々と残雪を頂き、素晴らしい眺望だ。

泰西の名画の前に佇つた想いだ。讃美歌を声高らかに歌ふのである。唄声は向ひの森にこだまとなつてかへつてくる。

今ここに手にしてゐる古い聖書をめくつて僕の青年時代が甦つて来てなつかしい。

ウッドファイバー―

しかし冬が過ぎて春が訪づれる。今までストーブのまわりに集つてゐた体も屋外に出て暖い春の陽ざしにふれると身体の内側からおのづと自然と伸び／＼した気持が出て来るようになる。春の長閑かさはどこに居てもよい。二重の有刺鉄線の下には鉄網の下の人の踏まない所には早やタンポポが咲きそめた。このタンポポでウチの春が的況をかすめた。庭に花を咲かせる目がこうも異つたかと驚く。僅かの畑に蒔かれたレタース、人参、トマト、菜などの種子が次々に芽ばえして、老人の丹精で日増しに成長しつゝある。

金網の外は歩行困難な程と脊の低い雑木が密生して果しなく目路の限り続いている。その原野の所々に起伏があり、二、三十尺の高さの桃樹のこんもりと茂った森も点在していて、柵の中から眺むる詩趣を高めている。（薪切りに）白蝶が二匹もつれつゝ柵内へ飛来し、わが目をとらえて孤独を慰めてくれる

ウットファイバーで（清水牧師より）催された家庭集会で「イザヤ書」を習ったように記憶している。現在自分が捕虜キャンプに居る環境のせいか、この個所がおぼろげながら頭にピンと来た。また文章も実に美くしく心を引きつけられた。

旧約聖書はこうして捕虜という運命の下にある自分にとってより一層心の拠所となった。

132

一九四三年 五月

春の訪れがおくれた此の容所では五月となると柵を越えて吹き来る風も暖かく、四方の雑木の芽木がぐんぐんふくらんで色とりどりに花のように美しい。強い一雨ごとに紅、黄、緑と色を深めてゆく。ポプラ並木のそよぎは朝毎に孤独を慰めてくれる。

一人の友人は軒下の日当りのよい所に小形の築山をつくり、山や川を置き、山にはトンネル、川には鉄橋をかけ人馬も通っている。汽車がトンネルへ入らんとしてる、仲々こった築山である。又私も庭園を思い出しては郷愁をそゝる。

今一人の友人は花作りが好きで朝顔、コスモス、スイトピーなどの種子を播いて水をやったり除草をしたり[illegible]肥料をやっていたが、その甲斐あって八月に入り綺麗な花を咲かせた。花の少いこの鉄柵の中で皆がめずらしそうに寄って来ては眺め、私も慰められた。多くの人がこの花を毎日眺めて、同時に単調な殺風景な容所生活をうるおうした。

或日友人より朝顔の苗を頂いて煙草罐の中に植えた。朝夕水をやり日当りのよい場所に置きかえたりして丸で我が子を育てるように関心を持っていたが成長も悪く、これでは到底開花はむつかしいな……！と落胆していたが、初秋の頃より段々勢いが出て小さな蕾みを一つつけているではないか。やれやれこれでどうやら花になりそうだと毎朝開花するのを待つうちに、赤い綺麗な花が咲いて僕をよろこばせた。[illegible]

如何なる趣味であれよいが、こうした生活には一つの心の支へとなるものを持つことはよいことだと痛切に感じた。

煙草罐の翔顔から翔は五つ目が咲いて花も大分小さくなつた。
空は晴れ切つている。向いの森から鳥の啼く声が交えて来る。
鳥の啼く声を多く聞くのも この柵の中ではめづらしく心寄りゆく。
こうした爽やかな初秋の或日のこと、今日は加賀川先生の一つ
粒の夢と そよぐ。
清水牧師がかつて戦前伝道のため当村に来村せられ、一場の講演
が当時青年であつた私にとつて どれほどの精神的影響を及ぼし
たかは想像に余りある
それは確に私の心の奥底に生涯忘れることの出来ない一つの指針を与へた
當時未だ当村には教会等が無く牧師もめつたに来られないので 聖書の
講義を多く聞く機会は殆どなかつたどころか全く無い程であつたが 私の心の隅に
どこかにその指針はひそんでゐたのであつた。

歳月はあれから大きく流れて、今斯うした苦悶の生活を続けて
いる時、あの時の清水先生の言葉が 完全に私を捕えることとなつた。
一語一語深くかみしめながら 幾度となく繰返して読んだの
であつた。
清水先生が伝道に来られた以前に 唆市より東牧師が布教に
来られて集会が催されたが、その頃は それと云ふ理由もなしに何故か
お話しを聞き行く気がしなかつた。今から思うと惜しいことをした
と後悔している私である。

白川君の遺骨は 遺族の請願により 許可されて 郷里 福岡県の 行橋市
未代の祖先の墓地に埋葬された。

③

379字

…くなった。
…えて参る。
…守りゆく。
…川先生の「
一場の講演
…旨を反ばし
…を与へた
…ぐ　聖書の
…の心の隅に
…生活を続けて
…えることとな
…して読んだの
…が布教に
…なしに何故か
…しいことをした
…行橋市

一九四三年八月　　501-子

ハーブワヤーの外の小高い丘に独逸兵士の墓が七基伸びるにまかせた新草の中に埋まっている。

柵の中からこの墓が全然見えないので　今日初めて墓が此処にあることを知った。炎暑身を焼くが如き盛夏の或日　我等五名は銃剣を持った兵の監視の下にこれらの墓の除草をさせられた。入所の時くぐったこのいかめしい獄門を（今まで何回くぐったことであろう）外から立ち止まって暫し見つめた。

衛兵の監視下とは云へ　獄門を一歩出たことによって　今日は何だか気分が晴々とする。ニハトリが鶏舎の中から表の庭に開放されたような心地である。

合掌して

これ等七基の独逸兵は [illegible] に来って　このキャンプより脱走を試み、不幸にして高見櫓の衛兵に見付けられ射殺されたとか。今は同じ境遇にある我が身にひきくらべ　うたた同情の念禁じえない。両手を合せてしばし目禱を捧げた。立ち去る時何か心を引かれる思いがするので　何人もあとをふり返り眺めずにはおれなかった。

私がマニラ(?)に着いた日「中野君よく来た　戦争は日本が必勝だ　我々 [illegible]」と固い握手を以て迎へた。（又一年六ヶ月後に [illegible] 捕虜キャンプより出所することになった時も極力引き止めた）友人白川君。（この人は私と又晩市移民館内で許されも道づれとなった峰本氏）（この人は私がこのキャンプに見切りをつけて出所の手続きをした事を知り、衆目の中、[illegible] 罵倒を浴せた。」

白川君はアマリヨにて病を得　私が出所した後不幸にしてアマリヨの露と消え去った（前記独逸兵と共に枕を並べて居り、）峰本老人はムースジョウへ移転後　同地のキャンプにて逝去(?)されたと聞く

人はそれぞれ顔容の異なるように　又自ら思想も異なるのであるが、

この峰本老人の如き無知のがんばり屋が相当数居たために、出所を希望している多くの二世青少年が、その手続きを躊躇している態を見て気の毒に甚だ悲しかった。

今日も毎日のように多くの人々が柵の中を歩いている。その中に加わって自分も砂の上をあてもなくとぼとぼと歩いていると霧が段々深く立てこめて来て、鉄柵の上の電灯の周囲に凝っている水蒸気が美しくまとって朧ろな輝をかけている。僕は鉄柵と同じ方向に向って歩くもの、又反対の方向よりこちらに向って来る者が幻影のやうに砂上をふんわりと乾燥の風紋やわらかであることが如何にも霧にへつへずれて歩く人々を見ると皆んな何か悲しい思いにふけっているか、悲しい思いに沈んでいるかしているようで自分もまた何とはなしに夢心地になって歩いていた。

収容所には八月の声とともに二度目の秋が訪づれた。

太陽が西に傾くと紅葉した雑木林が錦のように輝き、見渡す限りの原野は素適く。その景観は実に印象的である。

朝夕は急にストーブの側が恋しくなる

秋は読書の候で、この頃読書熱が高まり皆ともども本を読りよんだ。

特に私の好きな歌集「太田水穂」「石川啄木」の二歌集を見付けて無我夢中になって読んだ

歌集を毎日夢中になって読んでいる頃。よみかけた聖書をもっと深く勉強したいという願望が常に心の隅にあった。

九時消灯後、人声も段々小さく、あたりが静まってゆくと、僕はきまったように独りしずかにもの思いに沈むのであった。そうすると「お前は保護キャンプの中にいつまで居るつもりなのか」この言葉が今夜も又昨夜と同様に「毎日呑気に読書に耽っていてよいのか」と私の胸に迫って来て苦しくなる。

八月の声を聞くと共に収容所に二度目の秋が訪れた

窓の外はまっ暗い闇で空には天の川が横たわり、美しい星がきらきら輝いている。（夜ふけゆく空にはまたたいている／夜空に）

あれ、出所
躊躇
自分も砂の上
て、鉄柵の上の
けておる信鶏と
刻んだのやうに
つぶされて歩く
んでいるかして
返す限り
さんず本
歌集を
書をも
てゆくと、夜
をうすると
中にいつまで
この言葉
夜空に
かがい

11

◎ もう十一時を過ぎたか仲々眠れそうにない
夜警の時計の靴音が近づいて来る。そして又遠ざかってゆく。
窓の下でコホロギの声が聞え、夜空はますます冴え渡ってゆく。
（致一首）

332 字

（6）

◎ 収容所の中では戦争がいつ終るか少しも予測がつかない。
多くの青少年はこの中の生活に飽きが来たように見うけられる。
毎日一定の時間、それぞれの好む娯楽機関によって遊びが行われるが
特に夜ともなれば昼間のはしやぎは跡形もなく ひっそりと静まりかえる。
かつての中ではなつかしい母や故郷を思い出して語る者 上海流の流行歌をよい声で唄っている者がある
彼等は夜毎に二、三人づつ集って棚ベッドに腰をかけ ひそひそと話し声が
ますます望郷の念にかられる者が如何にも哀れに見える。
自由を束縛されているこの中の生活が 彼等をは
歌。別れ住む流れおほゆる

一九四三年
これは次の頁のその次に書いた
◎今日もまたこの中独特のニュースを多く聞くことが出来た。
太平洋方面の戦局はサイパン、テニアン、グアムで激戦が行はれ、九月に
日本基地パラオが攻撃をうけた。十月になってから米機動部隊と沖
縄、台湾、ルソンで戦を交へている。そして十月には マックア
ーサ将軍と再度の激戦をフイリッピンのレイテ島にて交へている。
この時も日本軍は大いなる戦果をあげたと報道した。
こうした激しい世界の移り変りをよそに、我々は今日もたのしい俳句会

が開かれた。 前田普羅選された課題「天の川」が梅節宗匠の
指導の下に 一句づゝ丁寧に批評が加えられ 最后に入選句と作者
名の発表があった。 自己の句が入選しているかどうか が気になって
選者の発表を待ちわびている
斯うしたのしい句会が もう長い間続けられていて 孤独な我々の大
みんな大いなる慰安を与えられ。 精神的に得るところ甚大で
よい趣味だと云って一同大喜びであった。

一九四三年

今日はめづらしく美しい夕焼日を背景に、 青少年の一団に
よって日本の軍隊教練が行はれる。
規律正しい伝統的日本の軍隊の姿を思いうかべて 祖国が思なつか
しく遠い明治の日を思い出に耽る。
それが終る頃は 太陽はいつしか地平線の彼方に落ちて没し、やがて
夕闇が迫って来る。
昼間の暑気はいつしか去って 収容所の柵を通り抜けて涼風 吹き通す涼風に昼
が流れて来る の暑さはあとかたもなく
あたりは除々に闇に包まれる頃 ハーブワヤーの一万燭光の灯
が電気明ん輝き 其処は闇夜を昼より明るくする。

歌

収容所の
道句と作者
が気になって
然し我々の元
る甚大で

年の一周に
俳句が
中心となったか
設し、やがて
下涼風に座
遠け下涼風
万燭光の灯

13

一九四三年

今春以来政府は赤十字社代表（スイス領事）を当収容所に再三派遣した。
目的は各方面に亘っていたようだが　主として交換船で希望者の日本送還
の件があったようだ。　又本人の希望によってキャンプを出所して職業に就
きたい者のために、各種の仕事口を持って来た。
今年の二月頃であったが　まだ寒さ厳しい折柄　この収容所から多数の青
年がネーズへ山働きの仕事口を取って出所した。　これ等は大方二世
青年が大多数であったが、一世も若干混っていたようだ。　一世の方は皆
無妻者ばかりで。　おおむね家庭の事情で出所したもの、如くである。
私は夏の気候のよい時に出所したい希望を持っていたが、　この中の一般の空
気が至ってデリケートであり、　へまな事をしてあと味の悪い印象を
残したくないと　慎重な態度で時期を伺った。
がんバリ屋の目が厳しく実行にうつすまでに仲々困難を感じた。
私はやがて出所するその日までの一日一日を、再びこんな生活は二度と送り得ない
真に貴重なものとして有益に過したかった。
昨年創立された俳句会は今もなお盛大に続けられ満一年を経過していた。　いよいよ出所
このキャンプを遠からず出所する自分のことを誰れも知らなかった。
の日のことを思うと　多くの句友との別れが悲しくて今から気弱になる。

⑪
いよいよ秋も深まり紅葉も散り果てた或日　この中の生活が如何にも希
望のない消極的であることを考えながら　意を決し人目をさけてそっと
出所の手続きを行ったのである。
行く先はトロント市内、カナダパーカー会社であるが　未知のトロントには友人
もなければ、同行の者もない。
手続きを終了したもの、[illegible]は

147字

15

[illegible]

仲々眠れない。不安を抱きながら一週間も経過した。
十一月十五日当局よりトロント市へ出許の許可を受けとる。ようやく明日は
アンクラよ、さようならをしなくてはならなくなった。

502

© 何の変哲もない日が続き 世は既に冬の様相を呈して来た。
大陸横断鉄道のレールが 血のような夕陽の名残りを浴びて 涯しなくオンタリオ州の原野を貫き 遠く暁暮彼方へつづいている。空々なカリガネが列をつくり
夕陽を指して飛んでゆく。
短歌　レール二本残照に燃えて一つになるこの安らかさわが身に反す。

(○) 夕陽と原野と冬木立。そしてレール。物音一つしない何と荒寥とした景色であろう。その静寂を破って けたたましく貨物列車が通り、毒汁のような煙が線を押し包み 一瞬にして幻想の世界から現実へと引戻す。やがて空に一番星が瞬く頃ともなれば 監視所にも一万燭光の灯が点る。昼をあざむくばかりの明るさとなる。夜気は急激に襲いた。八十のベッド、四つのテーブル、数脚の長ベンチ。それに三つの暖炉の待つ薄暗いハットへと足を運ぶ。九時の消灯まで読書に耽る。…秋の夜は思いの外長く 灯を消されても仲々寝つかれない。ベッドの中でささやく青年の声があちこちから聞えて来る。何がかもの哀れさを感ずる。
その中一人は[illegible]涙を流している

歌 読者の歌

よく明日は

502

ほしなくオンタ
ネが列を〔つくり〕
返す。
と荒寥と
貨物列車が
心の世界から
監視所れも
夜氣は
ペンチ。ぬれ
れてゐ仲々寝
ちから聞えて

15回 いよいよ二十七ヶ月間の捕虜生活を終へて、自由にトロントへ出市する日が来た。一九四三年十二月十六日。
問題となつた。この時僕の頭の中には大きな東洋の地図と、一つの地図が
幻として描かれている。それはアンカラ収容所から未知の市トロントを
結ぶ一つの鉄路が、はつきりと引かれているのであつた。
オロラの〔…〕書いた〔一〕オロラの歌を一首のせること!!

思へば一九四二年三月十六日道路キャンプへ向け出発して以来一年九ヶ月の
月日は流れた。
一日に二十年八ヶ月という年月、~~さりながら晴日を思ひ出すにつけ~~ ここでの二十ヶ月は、
かつて経験したことのない全く特異なものであつた。
いよいよアンカラを去る日がきた。
時は一九四三年十一月十六日である。最後の一夜の眠りを思ひ出深い収容所に過した
僕は、星の美しく輝く早暁に目を覚まし出発の準備を思いめぐ
らす。捕虜の身であれば手荷物は簡単である。ただ気になるは、所内
にて書きためた詩歌や散文、日記など出所の際没収されはしないか
かと、懸念された。
しかし危惧する程の事もなく検閲は終つてくれ
と思つた。

この日出所した者が外に二名居た。補兵に守られて獄門へ向ふ途
中、顔張居が近づいて来るので危害を加へるかと思つたが、彼等は
出さなかつた。しかし散々に悪口をならべ罵り、つばきまで吐きかけた一人の老人
が居た。
獄門をやおら出て、昨秋前に通つた跡を今度は反対に駅に向つて
行く。事件の道すがら淋田となく住んでいた厳めしい収容
所をふり返つて見た。
トロント行の汽車に乗つて今離れようとするこの駅と、「アンカラ」と書い
てある大きな名前を感慨深く眺めざるを得なかつた。

450字

(c)オナダ大陸の地図の上で　このアンカラの捕虜キャンプなど、一体どれだけの人が知っていることであらう。第二次世界大戦の折、この地に日本人捕虜八百余名の収容所であったということなども、恐らく過去の物語りとして何人かの人々に云い伝えられるに過ぎないであらう。

しかしこのアンカラ捕虜キャンプが、総ての一生にとって決定的な転回を与える場所となったのであり、総個人の生涯にとっては永久に忘れることの出来ない場所となったのである。

中に何等かの足跡を残しているであらう。

大きい存在を示し

458

やがて汽笛の音も勇ましく、汽車がプラットホームへ入った。駅舎名ばかりの小屋が一軒あるのみだ。この辺りは見渡すと人家は一軒も見当らず、ただ雑木の野原が続いている。来事する客は我等三人のみ、下車する客は一人も居ない。

少量の食料品らしいものが降ろされて すぐ発車した。

収容所をはるかに眺めながら感慨無量であった。さらばアンカラよ 過去の追憶に耽る暇もなく汽車は静かに動き出した。アンカラよ捕虜キャンプよ さようなら。同胞八百人の兵舎よ。さようなら。

汽車は今なつかしいビーミー州の北部を更に東部をさしてずんずん走る。車窓に拡がる新らしい風景が、早くも過去を忘れさせ、心の目を前方に向けしめる。沿線到る処に牧場があると

長閑な放牧、羊の群。草野を貫く川や森。

人家は綺麗にポツンポツンと点在している。
画を見るような素晴らしい丘陵のスロープに緑羊の群の移行する
態、すべてが悠々として落着いている。ただ「雄大」の一語に尽き
る。十月とは思えぬ程に空は晴れ切って暖かいのだ。捕虜で
あった事も忘れてしまいそうである。「こんな所に妻子を呼び一生を送っ
たらどんなに幸福であろうか」こんな思いも湧いた。
籠から放たれた小鳥のように、収容所から解放された一日目から新ら
しい希望に満ちた世界が、自分の心の視野を新らしく大きく開いてくれた。
前途に何が待っているか多少の不安を意識しつつも、胸がふくらむようで
ある。
汽車がトロントに近づくにつれて遠くに見える所のパーパーが色彩
色とりどりに綺麗な紅葉である。市中に到る迄に街路樹が
目立つ。午前十時頃汽車は目的地トロント駅に到着した。オンタリオ・パーカー
会社の出迎えをうけて共同宿舎へ。翌日より就職B.C.州
グリーンウッドより来た一人の老兄がトロントへ引越すという事で、その人の住む家
を去ることになった。
今日34枚
カナダ・パーカー会社の社員の出迎えをうけて自動車に同乗した
わざわざ遠廻りしてサニサイドを通り オンタリオ湖畔の風光を観賞させて
くれた。 輝やかしい太陽の光りが車内一杯にさし込み、美しい
オンタリオ湖の風景がぱっと東窓に繰り拡げられた。この時の明るい表情
らしい印象は恐らく何時までも忘れられないであろう。暗黒の中から抜け出
てから解放された喜びの日……忘れ難い……!
十八ケ月ぶりに見る湖である。やはり湖はなつかしい。波静かな湖水
は故郷の周防灘を聯想させる。
明治以来満二年、この間人間の世界が幾多の激しい変遷を辿って
来たのに対し、自然の世界は微動だにしていないのだ。今こうして檻の
中から放たれた鶏のように自由な平穏そのものの光景に接しては、
自由な身になったのが何より嬉しい。
只々神に感謝するばかりである。

平時に変らぬトロントの街の情景を見て、いったい戦争はまだ続いているのかと云った実感が湧く。

私共一行三人は行く先が異るので車中でそれぞれ別れを告げた。承知のトロント駅で下車して迷わぬようにとカナダパーカー会社より出所の婦人前に社員が出迎えてやるから安心して行くようにと言われて来たので私は何の不安もなくプラットホームを出て行った。

すると約束の如く一人の白人紳士がつかつかと近づいて来て、丁寧に言葉をかけて下され、片手の手荷物を私の手からとって すぐ前のレストラントへ案内し コーヒーを共に飲みながら これからあなたをサマビルの共同宿舎にお連れ致しますが、道中湖畔の景勝をお目にかけましょうと態わざ大まわりして湖畔を通る。

車窓を少し開けると 太陽の光りが狭い車内一杯にさし込み 美しいトロントの街の風景がぱっと車窓に繰り拡げられる。この時の明るさ素晴らしさは特に印象的であった。今まで暗黒と不安の中からすべてが解放されたような伸々とした その気分ーーーーーー

時に左側の車窓には波静かなオンタリオ湖の碧水が涯しなく続く。約一年ぶりに見る湖である。やはり湖は懐かしい。遠景はちょうど周防灘を聯想させる。湖といっても日本全面積の殆どある広さだ。埠頭には五大湖をめぐる貨物船が無数に碇泊していて 賑やかに荷作りの音が聞え トロント市の殷賑さを伺うことが出来る。

鉄道のメープルは殆んど落葉して一見淋しさを感ずるが、色とりどりのパンカロが郊外へと涯しなく続いている。

今日は小春日和とでも云うか 空は蒼く晴れわたり 秋陽は燦々と輝いている。

約半年間にして、やがて自動車はカナダパーカー日系人就労者の共同宿舎に着く。サマセットの宿舎にて旅装を解く。

ここには既にアルバータキャンプより僕より先に出所した者が三十名近く止宿していた。僕は翌朝よりカナダパーカーに就労する他の止宿者と共に毎朝六時から会社のトラックで会社へ送り迎えさせられる。トロントへ着いて二ヶ月経過するうちに、B.C.州・クリンウッドより妻と子がトロントへ引き越すというので、市内に親子三人で住む家をさがした。

トロントにて家族が一緒になり一応心落ち着くことが出来た。

時は一九四三年十一月。

その頃トロントには日本人はまだ少なく、僕がルームを借りることに左程苦労しなかったが、政府の政策によって数年の後ゴーストタウンから多数の日系人がトロントへ転住して来たことから急激に増加し、数千人に及んだ。その頃からルームを借りることが段々困難となった。敵国人であるためか、又人種の差もあってか門前払いをされる傾向も見えて来た。

まだ戦時中なので、私はアルバータ出所以来トロントにてカナダパーカー会社に就労していたが、敵国人である故月一回ヤウンテーのオフィスに登録のため呼び出されたが、これが非常に面倒でならなかった。これは遂に休戦になるまで続いた。

これで私も僕よき仕事に就職し、妻子もゴーストタウン(クリンウッド)より再転住した。かくして一応落ち着く所に落ちついた訳である。それから今迄の二年間の空白を取り戻すため、またトロントの街に、実社会に馴れるために呑気にして居られなかった。

日系人の東部へ移動になり、トロント市の市民は初めて見る日系人について、日系人とは一体どんな気持ちの人種であるか全く無知な者が多かった。（戦争中であり敵国人なるが故か）そして多くの市民は恐怖を感じた。仕事口は勿論のこと住宅を貸す人が少なかった。

一九四三年から四五年にかけてトロント市のカルトン チョウチの牧師 REV DR JAMES LARKLEY は、かうした折柄、日系人の為に貴重な教会の放送タイムを利用して盛んに熱弁をふるい「日系人たルームを貸しても家主に対し決して迷惑をかけたりツラブルを作るような人種ではないから安心してルームを貸すように」と大体右の意味のことを委しく説明し、弁護して日系人のために大いに（援助）尽力して下さった。

戦時中に於て稀に見る正義の人格者………この世に稀な正義のために闘うドクトル JAMES LARKLEY のラジオ放送が大いに効を奏して、今まで門戸閉ざされていたルーム借りが緩和され、一時トロント入市を禁じていたが、これも解禁となり の市を希望していた多数の日系人がよろこんでトロントの市が出来た。

ドクター こそ、まさしく戦時中にあって、聖書の中にある「汝の敵を愛せよ」イエスキリストのみ言葉を文字通り実行した訳である。私の胸には此の言葉が今も反射的に浮ぶ。神のみ言葉がこの時ほど実感されたことはない。（その当時から）今なほトロントに住む多数の日系人と共に私は永久に忘れることが出来ない

せい杯のかく乱れて国と国とが破壊し合い、人と人とが互に殺し合っていた第二次世界大戦中にあって、誰にもはばかることなく、ただ一筋に、正義のため、愛のため働いた尊い偉大な人が（日本の知る範囲に於て）たった一人でもトロントに居たということは、驚異であり、トロントの誇りである。そして今も尚ほ無限の感動であり、励ましであり、大きな力である。

あれから既に二十三、四年の歳月は流れたが、今なほ忘れようとしても忘れることが出来ない。

戦時に於いて敵国人のために働くことは（容易なことではあるまいが）何とむつかしい困難なことであろうか。牧師は市民から受ける懐疑の眼も躊躇せず政府の敵在政策に馴れぬ地に追はれて来た憐れな敵国民の味方となって一身を愛と正義のために捧げられたのである

その真実な国境を越えた愛の前に…………！私は目頭が熱くなるのを覚ゆる。これは一般的な問題としてドクトルのもつ人生観（人間愛）に由来するものではあるまいか、戦時中に起きた、めづらしい誠に立派な美談である。

エス、キリストにあってこそ、この偉大な仕事が出来たのであると信ずる。

戦時中日本国内に於て、米国は海外から派遣されていた多数の宣教師に日本はどんな態度をとったであろうか。日本人が敵国人に対してドクトル氏の如く愛の手をさしのべた者が只一人でもあったであろうか 日本国民の大いに反省すべきことと思う。

人間対人間でも、国際間に於ても最後の勝利は矢張り斯うした信の正義の実行者であることを第二次大戦が如実にもの語つておると思う。

トロント市は其後年を重ねると共に日系人数は増加の一途を辿り、戦後（ここ六二年新移住者の入市をも含めて）
二十数年を経て現在約一万に達した（八千近くと云われる）その間一世は戦争のために蒙った
物質的損害を挽回せんと未知のトロントに於て、が始めてカナダに上
陸した時と同様 パイオニア精神を以て再出発した。
それは文字通り悪戦苦闘、遂に戦前の経済状態をとり戻し、遂に
凌駕して、現在は立派なカナダ人として白人同等の生活をなしつゝある。

第二世は、 親達は英語に不自由したので せめて子女には充分な教
育を授けてやりたいと念願したが 大方の一世の気持ちであって 多くの二世は
高等学府を卒業し 白人以上の好成績で実社会において 各方面へ
進出して成功し。 それ等は今や壮年期に達し、三世、四世、と日系カナダ
アンは育ちつゝある

（戦争の大非常）
多くのパイオニア諸氏は未知と未開の国カナダに於て。あらゆる万難を排
し、カナダに努力苦闘の結果 よき種子を播き よき実を結ばせて 希望を大にし
カナダのため日本人の為、手腕を発揮して一抹の寂寞を感ぜざるを得ない。
次々と世を去って行く。
一抹の寂寞を感ぜざるを得ない
カナダによき種を播き、よき実を結び 日本人のよき真価をカナダに
発揮して、次々世を去ってゆく。 一抹の寂寞を感ぜざるを得ない。
近年 木の葉の散る如く

戦争勃発による総移動の苦難は申す迄もなく、戦時中並に戦後
二十数年間にトロントに於ける日系人の社会状態は 文字通り多事多難
であった。 到底言葉に云い得ない苦闘を重ねた。

300
249

辿り、戦後
たけに甦った
て力多に上
り戻し、違
ある
は元の自教
多くの二世は
各方面へ
せ、と日系力多
ゆる万難を排
お望を大とし、
真価
る、を得す
時中並に戦後
多事多難

戦時中に政府は、日系人が戦前住んで居たビーシー州の故郷に再び帰へさせまいと、カナダ国内に散在政策を強行した。その為め多くの者が気候に馴れぬ平原州のシュガービーツの農園、或はオンタリオ州、其他の諸州へ再転住させられた。ところが早い者は戦時中に、おそい者は終戦後各地ゴーストタウンよりトロントへ再移動する者が激増した。トロント市を目当てに来た者が余りにも多数に上ったため、一時日系人の入市が禁ぜられた。

その頃ゴーストタウンでは未知の東部への再移動を恐れ、政府の散在政策がスムースに行かなかった。

そこで政府では東部へ再転するか日本へ引揚げるか、二つに一つの道を採るようにサインを要求した。その当時は戦時の混乱時であり色々馬鹿げたデマが盛んに飛んで世の人々の心を大いに惑わされた。その例として東部の寒さは想像以上で、婦女子の住める土地ではない」と

そこで沢山の子供と年寄りを連れた者は東部への再転住を恐れ、途方に暮れておった者が多数居たようだ。いずれの途を採ろうかと思案の果て、「馴みなれた日本へ帰れば何とかなるであろう」と多くの子供を連れた者が狭い敗戦日本へ続々と引揚げて行った。

船が横浜へ着くまでは日本の必勝を信じ切っていたが、自分の船が横浜の桟橋に横付けされず、見た事もない浜の沖合に碇泊して船は錨をおろす。そこから艀に乗せられて砂浜に上陸させられた。「これはどうもおかしい、不思議だ。」日本の必勝を信じて来た然横浜桟橋から堂々と上陸をなすものと思っていたが、予想は全く正反対だ。

この現実に直面して始めて祖国の敗戦を認めたのであろう。

之は祖国へ引揚げた友人からの第一信であった。

又カナダ政府は家族を道路キャンプへ送り、家族を他の地方のゴーストタウンへ送り、家族を別居させた結果、お互精神的に大いなる打撃を被ってゴーストタウンにて風紀紊乱が伝へられた。これは戦争中とは云へ何れに悲しい、不幸な事である。アメリカはカナダと異り、戦時中家族同伴で転住所へ移動させ、終戦と同時に又元の古巣へ帰ることを許された。この二ヶ国を比較して見る時、日本に直接敵国であったアメリカの態度の実に非常に人道的なのに敬服させられた。アメリカは常に言うことと大国の襟度を持ってゐる。

一九四四年 また戦時中のことであったが 日本政府は 「在加同胞が敵国内に於て食料に困ってゐる事であらう」 と、トロント在留日本人宛に 赤十字社を通じて日本から 醤油、味噌などを送って来た。

その頃は日本人が盛んに、ビーシー州のゴーストタウンよりトロントへ移動して来つゝあった頃で、(日本人移動の混乱時代であった。) 従って現今のように日本人の諸団体もまだ組織されておらず それらの荷物の一時的仕分け置場が無くて困った。

時に、日本人が毎サンデー集まる国際合同教会宛に荷物が届けられた。

さて、それらの品を如何なる方法で、市内在留日本人に分配するかにつき協議が進められた。その際二つの意見が対立して激しい論争が沸騰した。

一つは二世の意見で、彼等の言ひ分は 「我等日系カナディアンは戦時中敵国(日本)の援助を受けない」 と拒絶するグループと、もう一つは祖国日本政府の厚意を有難くお受けしたらよい」 と主張する一世側とであった。

この問題は相当の期間議論が続き解結を見なかった。

その間、プンプンたる味噌、醤油の臭気が教会内に発散する。思案の揚句、時の国際教会牧師ドクター・スミス牧師に相談したが 「かまわないから双方の話しの解結を見るまでいつまでもここに置きなさい」 と、少しも悪い顔も見せず、混乱中であった日本人社会のために同情し、何事もよく理解して下され 愛の精神を以ち日本人によくお世話賜った ことを今なお忘れる事が出来ない。

750

761字

コーストタウン—なやみ苦しんだ 泥

打撃を被って
とは云へ、戦時に
同伴転住所
国を比較して
遥かなる人数
加同胞が
ト在留
ごを送って
シトへ
移動して来
団体出来ず
場が無くて
れに荷物が
方人に分配
対立して激し
パンは戦時
プンと。もろ
と主張する

750

と
する。思案。
かまわな
まさい、「困惑」と
社会のために
お世話帰った

761字

25

私ら日本人は醤油・味噌は毎日なくてはならぬ調味料であるが、
それらの品物を開戦以来殆んど口にすることさえ出来なかった。
今遠く海を越えて祖国から政府の配慮によって、
[illegible]意により我らに届けられた味噌醤油である。
曲折の後、解結した一世が有難く頂き、
国の味噌醤油の美味しい味と香りを嗅わしながら[illegible]
これ等の問題も戦時中、トロントに於ける日系人の歴史の中の一駒
として残され、平和なる日から振返って考へて見ると 面白い
エピソードである。
メナリ政府は開戦後間もなく、日本人のロッキーの造路キャンプへ送り、その男子をコーストタウンに家族同伴者を別居させた結果、お互に計り知れない精神的なやみ悩んだ。これは前述とは云へ あまりにも悲しい。不幸な事である。
翻って、米国は開戦と共に家族同伴転住所へ移動させて 終戦と
同時に又元の古巣へ帰ることを許された。この両国を比較する時、日本に直
接敵国であったアメリカ政府の態度が全く人道的であった 敬服させられた
アメリカは常に堂々たる大国の襟度を持っていることを 教えられた。

22

21—22の間に入れる

今年も明けて早や二日となったが トロントの二日は年中で一番寒い季節と
云はれている。朝は未明より起床して カナダ・パーカー会社に出勤。
七時より午後五時まで働く。 その間の一日は九時間働きである。日系人の
若い青年が大部分で三十名程が就労している。この会社は欧州各
国移民が多数居て人種は多種多様である。これらの人種に交って、
日系人は従来種とよく同化し 従順に働くので会社側から段々信用を
得て「日系人はよく働いて使へる」と云はれる様になった。

やがて早春も過ぎて五月を迎へた。トロントの五月はようやく永い冬から解放されて うららかな陽光を浴びるようになった。
この頃新聞は、アメリカの機動部隊が関東一円に大空襲を行ひ、同時に数個の歩兵師団が硫黄島に、また沖縄に大規模な攻略作戦が展開されたことを報じた。
またヨーロッパの戦線は連合軍が、ライン河の線に達し、渡河を開始して最後の突入を報じ出てゐる。

確か五月二日であったと思う。ドイツの首都ベルリンは、ロシヤ軍の攻勢のため遂に陥落。五月七日にドイツ軍は連合軍に対し、無条件降伏をした。かくしてヒットラーとナチス国家は地上から姿を没し、劇的な終幕を閉じた。

その頃私はトロント市のロバート街のユダヤ人の家の二階に住んでいた。家主の八十才にもなるおばあさんが表口より私共をしきりに呼んでゐる。始めのうちは何のことやらと相手にしなかったが、何度も続けさまに呼ぶので、これは只事ではないと思ひ おばあさんが階段を踏みはづしてころんだのだらうと直感して大急ぎ階下に降りた。見るとおばあさんは何事もなく、早く戸外に出て見なさいと云う。街上至る所ドイツの無条件降伏の号外が撒かれてゐる。寺院からサイレンも鳴りはじめた。あちらからも、こちらからも交錯して聞えて来る。仲々長くて止みそうにもない。
破竹の勢であれ程強かったドイツ。日本と三国同盟を結んでいたドイツ。日本の片腕が無惨の敗北した訳である。
嗚呼やっぱりドイツは敗戦に終ったのかなーーーー
実に感慨無量である。

567字

回復の喜びから実感される。いつまで続くか見通しのつかなかった戦争も、ドイツの敗北によって大方半分は終ったような気がする。今までナチス、ドイツの国力の強大さ、ヒットラーの威勢の盛んであったこと、又ドイツの全体主義国家の秩序整然としていた事を教えられておった我々は如何にドイツ民族に崇敬の眼を向けていたことか。しかし今は完全な敗北である。僕はこの時、英雄と国民から崇拝されるものの末路の如何にあわれさ、その実態をはっきりと見せつけられた。我々はさきにムッソリーニの惨めな死を知り、こうした一時的英雄に導かれ引きずられる国家、国民の如何に悲惨なことかを痛切に感ぜずにはいられなかった。次はいよいよ日本の番である。あると語る声も今日は特に悲痛な思いである。日本一国が殆んど全世界相手の戦である。到底勝てる見込みはないと思った。もうこの戦争も先が見えているような気がする。こうなっては無益な戦争をいつまでも続けていたずらに生命を犠牲にするより早く戦争の終結することを僕はひそかに願った。

第二次世界大戦は世界の歴史に一大回転を来たしたと同時に我が身にも一大転換期をもたらした。アンカラ捕虜キャンプより開放されて トロントへ出市、オナタパーカー会社に働（ト市で）くことになった時の私の気持ちは、日本から最初ビクトリヤ港に上陸した時と同じ決心のもとに、文字通り裸一貫からやり直しが開始された。その為1時間六十仙の給料で九時間働いたのである。サタデーも半日働く。今から二十四年も昔なので、その頃はまだ若く随分働いたものである。妻もトロントへ来た以来一年余り遊んでいたが 小さい子供が多いので働 或日

子
やく永い年
発表を行い、
模な攻
し、渡河を
は、ロシヤ軍
無条件降伏
劇的な終幕
信んでいた。
しきりに呼んで
続けさまに呼
みはってきた
おばあさんは
無条件降伏
あちらからも。
はない。
血を結んでいたド

きはしないと云ふ。「矢は外れ過ぎにあたらなくともよい」と、私の止める言葉お耳かさず「遵者であるのに少しはじっとしておるのも退屈だから体の健康のためにすこし働く」と云ふので本人の意志に任せた。

二人で働き始めて間もなく、住宅を購入って引越した。

矢張り我が家と云ふものは気が落ちつきがあってよいものだと痛感させられた。家も子供もおることだ。生活の安定を確保することを得て希望に満ちた日を送ることが出来る様になった

65字

戦争も愈々終局に近づいた気配が濃厚となっていく。多くの人が戦争の終る日のことは何より気にかかっているようである。然しトロント市の外観の世界は少しも動揺の様子はなく、世界のどこで戦争をやっているのかと言った底力を見せている。

戦況はすでに硫黄、沖縄島も陥ち、日本本土が次第に戦場と化しつゝあることを英字紙は報じている。更に機動部隊が傍若無人振りを発揮しつゝ内地の到る処を攻撃してある。その上艦隊より陸上砲撃まで加へられている。こうなると日本の敗戦もいくら贔屓目に見ても時日の問題であろうと思はれた。

七月末頃であったが遂にポツダム宣言がニュースに報道された。引き続き「無條件降伏」の言葉が紙上に出る。遂に「大和魂」とか「神州不滅の精神」はどこやらか飛んで消えてしまった感じがする。

間もなく怪ニュースが報道されて我が耳を震撼させた。それは「原子爆弾」を広島と長崎に投下して、両市潰滅していたことである。

戦争とは云へ、事もあろうに非戦闘員に対して何と無茶なことをしたものである。どう考へても実感とはならず

控のし
の止める言
んから体の健
。
した。
ますのだと痛切
確保する
まったた
650字
いく。多くの
める。然し
世界のとこで戦
方に戦場と化
傍若無人振
日本の敗戦も、
された。引き、
きやらか飛ん
させた。それは
頃滅していたこと
見に対して何と
臥とはならずに心の

かねて胸底から激しい憤りが溢き上ったのも無理ないことである。
その同ソ聯の参戦が伝えられ、祖国日本はいよいよ最後の段階へ追い詰められたことがひしひしと胸に迫る。情勢はポツダム宣言を日本が今日受けるか、明日受けるかと云ったところまで来た。
八月弐日 わが職場にて 数名が朝刊を囲み互に話し合っている。何事かと近づいてみると、原子爆弾 という大きな見出しで 広島、長崎は潰滅したことを報じている。 私の顔を見るなり（僕の顔を見るなり） 一人の背の高いドイツ人が は「君のホームは日本のどの辺にあるのだ」 と沈痛な面持ちで尋ねて呉れた。 広島でも長崎でもない と答えると それはよかったね！！！と わが手を固く握りしめ喜んで呉れた。

650字

今日は朝からむし暑い炎暑である。[illegible]（午後より）と安定した頃であったろうか サイレンが街のあちらこちらから、高く低く、たがいに交錯した音が余韻を引いて聞えて来る。
この前のドイツの無条件降伏と比べてみて 今までに全く経験のない最も悲痛な瞬間を味わった。
しばらく考へこんでいる中に、 さっきの瞬間と異ったものが心の中に「平和」という気持が全身に蘇えって来て、ほっと安堵が全身に漲ぎる。
「これで全世界の戦争は終ったのだ。 もうこれで人間同志が互に殺し合うことのないように」 と静かに神に祈った。
「平和」の到来――！ 私はこの時ほど 「平和」 という言葉をしみじみ味わったことはない。 このみじめな戦争を体験した全世界の人々が、この歴史的瞬間を二度と決して忘れることがないなら、 このような世界

大戦は再び起らない筈である。　愛する祖国が戦いに敗れたという痛ましさ、何とも例えようのない深い悲しみに沈んだのである。然しこの場合勝敗を越えて、　悲惨な大戦が終ったという喜びの方が圧倒的であった。

450字

かくして全世界に平和の曙光が再び甦った。

この時静かに第二次世界大戦のあとを振り返って見る時、　思いも寄らぬ方向に世界史は辿ったものである。

敗戦国日本について見るならば、今度の戦争は結局何一つ得るところはなかった。　ただ数百万の尊い人命の犠牲と、　荒廃した国土だけが残っている。　戦争の罪悪や悲劇をきびしく強調してもまだ〳〵足りない。

こうした恐ろしい悲惨事が、　少数の誤った指導者によってなされてきたことを思う時、一国の指導者たるものの責任の如何に重大であるかに想い到らざるを得ない。　同時に国民一人一人が、　こうしたことに真実か否かを批判する能力を持たなくてはならないことを痛感させられた。

日本は幸いにこの敗戦を契機に一大転機をなしつつある。　日本は、もっと世界に大きく視野が開かれ、　デモクラシーの一員として世界の日本として、　二十一世紀の高度の文明を声高らかに世界に示したいと希ふものである。

字

敗れたという
である。
終ったという
心いも寄らぬ
得るところは
国土だけが残
し足りない。
ってなされて
に重大である
したことを
ことを痛感
のる。日本は、
の一面を見せて
世界に示し

八月十五日。

この日は日本の歴史にかつてなかった悲しい日である。日本の無条件降伏に続いて、マッカーサー元帥の率いる連合軍は続々と日本に進駐し、その様子が新聞、雑誌その他あらゆるニュースなどを通して全世界に報じられた。

九月になってから、東京湾内の米戦艦ミズリー号上において無条件降伏の調印式がなされた。それ以来各地に関する記事や占領下における日本の写真が雑誌などで見られるようになり、涙なしには到底見られない。

あれから早やくも二十年余、日本国民がこのような一大転機を経験しつつ、官民一致協力してあらゆる面で国力の挽回に努めた甲斐あって、躍進日本の原動力を世界に示すことが出来た。何と素晴らしい事である。全然無条件降伏をした当時、想像も及ばなかったことが、今は自分の眼前に現実となってあらわれ、全世界の注視のまとになっている日本である。

日本の敗北によって戦争が終ると

かつて収容所に居たとき、井の中の蛙の如く、正しい世界の動きを知ることが出来ず いつもデマである戦争ニュースに迷わされ、日本必勝を常に信じていた。そこで終戦のあかつきは戦勝の祖国で暮らそうと思い 交換船で帰国出来るように当局に申込んでいた。ところが日本敗北となり来る当日、百八十度の転換をして日本行きを取消すことに決心してオタワ政府に願書を提出した。約二週間後に政府当局より取消しを認めるとの丁重なる回答が来た時はほっと一安心した。思へば世界の微妙な動きと同様に、私一個人の心も二、三、四年間に猫の目のように変った。

捕虜キャンプ滞在中に交換船で帰国を請願したかと思うと、今度は日本敗戦の結果 帰国請願を取り消し、ええて彼の国のためにチグハグなことをやつたが、今から顧りみると、随分おかしな軽るはずみなことをやつたものだと、一つの笑い話にしているが、その時は皆真剣に考慮の上でやつたことである。

その頃、カナダ政府は外国よりの移民に国内居住外人に対して頻りにカナダへの帰化を奨励していた。

私共夫婦は永い間カナダ帰化について真剣に考慮の結果して居たので 愈々カナダに永住の決心を致したのであるが、国籍は依然として日本国籍である。 二人の子女はカナダ生まれで 日系カナディアンとしてすくすく成長しつゝあるし、将来がカナディアンとして成人となる以上、子供にとってはカナダは当然母国である。可愛い二人の子女に引かされて 自分の愛する祖国日本の国籍を潔よく捨てさるを得なくなつた。カナダを墳墓の地と決めた以上は当然国籍もカナディアンに変えねばならない。

帰化の手続をする様に申込んだところ 間もなく 何月何日に市役所に出頭せよと通知を受け、二人で行つて見ると、日本人、欧州人など多数一室に着席している。 一人宛ジャッジの前に呼ばれ色々な質問を受ける。それに回答しなければならないのであるが、僕は之れまで日本的な多くの伝統なり観念を身につけていたため自分にとっては、日本国籍を捨て、愛する祖国を捨て、カナダの国籍に帰するということは断腸の思いである。もとよりそれはカクゴの上で帰化を申込んだのであるが、ジャッジの質問にも同意をしかねて躊躇したけれど 之を思いなおし

570字

て「イエス」と答え最後に宣誓書にサインをしたのである。サインするに当り、わが心とペンを持つ手がかすかにふるえていた。

（一九四八年記す）終り

原稿用紙40枚

あとがき

日米開戦に伴いロッキーの道路キャンプへ送られたために愛する家族と別れ、ちりぢりに暮すようになってからははげしい孤独な日々を送らねばならなかった。

そのために僕は昔の好きな短歌に大いに拍車をかけた。

ロッキーの山嵐。零下何十度の酷寒につけ　わが心は走馬灯のように寂さと（ウッドファイバー）の家族のもとに飛んでゆく。毎日の郷愁と孤独が、みな短歌となって　私の日記帳に記されて行った。

ロッキーの道路キャンプから　スローカンへ。スローカンより晩市移民館へ。同じくアングラ収容所へ。収容所よりトロントへ。戦時中あちらこちらと　数奇な運命を辿って来たが　常に私の伴侶となり離れずつきまとって　私の悲しい心を慰めて呉れたものは短歌であった。

トロントへ一九四三年十月定着以来、業務の傍ら　好きな作歌を続けていたが、よき指導者を得られぬ　何十年やっても

独学では進歩のない事を悟り、指導者を捜し求めた。
その頃、今のように当地ハ二邦字新聞は無くて　私はシアトル
の北米報知新聞をよんでおりましたが、シアトル短歌会のある
ことを知り、すぐ入会を申込むと同時に月々短歌を送った。同短歌
会の主幹野菊先生の指導を受けた
つづいて一九四九年に潮音社に入社し　四賀光子先生
の御指導を受けて今日に至っています。一九五一年四賀先生の援助によって序言を
合同歌集を刊行した
その間、近年数回宮中御歌会へ詠進歌を送らせて頂いていましたが
一九六三年の御題「紙」に
私がかつて一九四八年カナダに帰化した時の私の心境を
具体的によみあげたのが計らずも
天聴に達しましたことは、誠に恐れおおい事で　有難く臣民
としてこの上もない無上の光栄と存じ　感謝感激致しました
「日々を送っています」。
天恩の大きさ

宮中への預選歌　　紙

墳墓の地カナダと決めて宣誓紙に著名するわが手はふるへたり　　中野武雄

一九六四年一月十日の宮中御歌会へ出席して畏くも天皇、皇后両陛下に
拝謁を仰せつかり　畏き御言葉を賜り感謝感激の極みであった。

しはめた。
私はシアトル
お会いの或る
けた。於縁致
お久子先生
生の援助によって
行した。合言葉
いましたが
の心境を
有難く医師
感激のうちに
中野武雄
ふるへたり
皇后両陛下
様みであった。

一九五五年の夏　私はふとした事から腰を痛めた。　九月下旬市立病院に入院させられ　二ヶ月病状を診た結果切開手術をすることとなった。

十一月下旬の或る朝　十時に車に乗せられ手術室へ向わんとする時ふと下村牧師がお見舞に来て下さった

「中野さん丁度よい所でお目にかかった。今ちょっとお祈りをさせて頂きたいがノースに許しを受けますから」と申されつつ、ノースの許可を得て、バイブルを片手に　片手は私の手を握り、おもむろに祈りが始められた。

力の籠った　熱烈な愛のほのめきは深く私の先生の祈られる一言一句、神の御言葉に引きつけられて肝に銘じた。私は先生のお祈りを聞きながら　その時腰の痛みも忘れて生まれいつしか先生の手を固く握りしめていた。かわった人のように晴々とした気分に変っていた。手術室行きの車に横にされたまゝ　私は先生のお顔を真剣に見つめていた。

先生のその時のお顔は実に神々しく、お顔一ぱい溢るるばかりの汗が噴き出で、両眼からはぼろぼろと涙が落ちていた。その時私はすべてを神様におまかせする気持になり　やがて始められる手術に対して何の恐れもなく　安心して手術室へと運ばれてゆく

手術も無事に終り三日目であった。下村先生は香り高い大輪の白菊を片手に、聖書を携えて再び病床を訪ずれて下さった。その時先生は神の庇護のもとに手術の無事終ったことを自分の事のように悦び、この上は一日も早く全快してたのしいわが家へ帰宅出来る様にと神様へ祈って下さった。私は心の底から神様へ感謝の念を捧げたのである。

病院生活の苦痛を味わった私は、以前にも増して神のみ恵みの尊さを体験、心の隅に求道心が芽ばえつつあることを知ったのである

神様のお許しがあって受洗を与えられる時来りなば　その時こそ下村先生に是非お願い申したいものだと決心していた　しかし私の受洗までに待たず下村先生は突然シアトルで御昇天なされた事を聞き、大いに打

難き夢か在か導きめてきました。未だお若い前途有為の方立派な牧師を天上にお送りした事は誠に悲しいことで心から哀悼の意を捧げたい。

五四年

終戦の頃よりトロント日系人間に各種の団体が次々に創立され始めた。そしてそれ等諸団体の大きな会合に適した広いホールがトロント日系人間に是非一つ必要を痛感するに至った。次第寄り日系人会館の建設の如何に急務なるかが一般に称へるようになった。

然し、日系人会館を建設するには莫大な資金の必要なため、話題に上るだけで具体化する迄にはかなりの歳月は流れた

その頃トロント日系ガーデンクラブでは日本の伝統的文化を白人間に紹介し文化交流のために日本庭園をトロント市内に建設する計画を進めていた。

しかしながら日本庭園建設も、日系会館建設もその資金はトロント在留日系人一般の喜捨を仰がねばならない。この二つの莫大な資金を同時に募集することは到底考へられないものと思った。何故なら少数の日系人から巨万の資金を集めることは実績がならぬ事が予想出来る。

そこで種々協議を重ねた結果ガーデンクラブの希望通り、第一に日本桜苗二千本を日本より購入してハイパークに植え、近き将来ワシントンの如き桜名所を作る事に決定した。これは既に六年前に実現した。現在はまだ若木で花も少いが、春来るごとに美しく開花してよき匂いを漂よわせ、なつかしい祖国を遠く離れ海外に永住して働く我々に郷愁を抱かせ、慰めてくれる。

な牧師を
意を捧げたい。

風が吹くに
ちに適した
至った。
がに一般に
ため、話題に
を白人間に
計画を進め
の資金は
の二つの莫大
思った。
続かあから
第二に日本桜
系カナダ人トン
実現した。
ど開花して
海外に永年

ゆく〳〵は爛漫と咲き乱れ カナダに於ける只一つの名所となるで
あろう。

桜花の盛りを見計らい 毎年日系市民協会主催の下に 桜花の下で
盛大な五月祭が催される。 各種の民謡の音頭に合せて踊る。
踊子は 一世、二世、三世 四世 総出で 日本着物も あでやかに、調子
を揃えて踊りまくるのであるが この日は多数の白人観衆が集まり、トロント
市の名物の一つと呼ばれている

トロント日系人間の多年の宿題となっていた事業の第二として 日系人会館の
建設問題がある。 この事業は主として二世が中心となり 一世がこ
れ協力して、一九六〇年 募金並に建設に着手されたが、 在留民
一般の多大な理解と援助によりて、 和洋折衷の 素晴らしく立派な
ホールが完成された。
この間に懐の混乱した事を 記入すること。

一九六三年 六月の日系人会館の開館式には ピアソン・カナダ首相が
オタワより はるばる来臨の栄を賜り トロント市長
オタワ日本大使 氏や日本より カナダ協会
会長吉澤清次郎 氏其他知名の方々の御列席を得て盛大なる
開館式が挙行された。
この日の開館式に ピアソン首相が
祝賀演説の中で 第二次

注 39ページへつづく

日系文化会館　開館式祝歌

一九六三年　六月

一、
朝日にはえてそびえたつ　緑の森にこだまして
けふのよろこび満ちあふる　老いも若きもいさ子たち
よろこび集ふ我等が会館　文化会館　栄えあれ

二、
カナダの広野にかゞやける　パイオニアの辛苦しのびつゝ
同胞一丸身のかぎり　こゝに捧げて建てたる会館
木の香も高き新会館を　いざや祝はんもろともに

三、
三世、四世我等が子孫　こゝに栄えて我が民族の
世界の民ととけ合いて　祖国日本の誇りを示し
カナダの為に尽さばや　いざや祝はん　文化会館

それから早や三十年有余の歳月は流れたが、日進月歩、日系文化会館は益々発展の一途を辿り　これはトロント日系人のみならず全カナダ日系人の誇りとして誠に欣快に堪えない

六月

あれ

子たち

して

ともに

てたる会館

しのびつゝ

民族の

を示し

化会館

人、日系文化、

ト日系人のみ

---

39 大戦中のカナダ政府の日系人取扱いは間違っていたとして 謝罪の言葉を述べた事である。これはピアソン カナダ首相によって代表されるカナダ人の正義感とフェアープレイの精神を如実に示したもので誠に欣懐に堪えなかった。しかしピアソン首相にこのような謙虚な態度をとらしめたものは、やはり在加同胞の私共の先輩パイオニアの今日迄の尽くされた苦心の結果だと思います。

（註）

以上、この原稿は一九六七年に起稿し一九六八年十二月に終る。（出版は一九六九年五月）

著書「宣誓」

約 30000字

中野雨情歌文集

柏葉書院刊

文集

回想記

はじめに

戦争とは？　今更云うまでもなく、国と国とが個々の意志の如何に関らず、互に傷つけ合い、破壊し合う事である。思えば我々日系人にとって第二次世界大戦は、悪夢のような出来事であった。

その悲惨な歴史を克服して、各地に於て戦前にも勝る地盤を築き、あらゆる分野に発展を遂げつつある同胞の涙ぐましい努力を見る時、私の辿って来た茨の道を、メモより抜萃して敢て披見するのも、無意義なことではないと信ずる。

道路キャンプ

一九四二年三月十六日。我等一世は遂に道路キャンプへの出発命令を受ける。第二次大戦初

発より将に百日、僕にとって生涯忘れ得ぬ運命の岐路に立たされた日だ。

顧れば渡加以来開戦まで約二十年間働いて居たウッドファイバーパルプ工場。ここはバンクーバーを去る海路六十哩の海浜、船でバンクーバーに通ずる工場就働者のみの寒村、日本人就働者三百余名、うち夫婦者約五十組、老人子供を合せて約五百名、日本国語学校も吾々維持会員により経営、百名近い学童を有し、二名の女教師を採用(私の妻も奉職)日系カナデアンの日本語の普及につとめた。当地には早くから日本人就働者を以て慈善団体を組織し、在留民の福祉増進、会員相互の親睦を計り、文字通り平和境を築いていた。

こうした平和な村に或日突然驚くべきニュースが飛来し、在留民の心を震憾させた。それは日米開戦の火蓋を切った、パールハーバー爆撃の報であった。

二月下旬の或日政府より我等一世は来る三月十六日に道路キャンプへの出発命令を受けた。日本の爆撃機が飛来すると云って毎夜燈火管制が行なわれるようになった。出発を間近くして種々のデマが飛び、戦々兢々とした日々がくり返えされた。しかし政府の命令だ、これも運命と思って悲壮な決意をした。

いよいよ出発の三月十六日は近づいた。

初めカナダ政府は、B・C州沿岸の日系人中、日本国籍者で、徴兵年令にある男だけを〃危険〃と見なして防衛地帯から移動、撤退させれば、それでB・C州の〃排日恐日〃の空気はしずまるであろうと考え、先ずそのワクの内の日本人だけを撤退させる発令をしたものだったらしいが、図に乗った排日屋どもは、この時とばかりに好い気になって騒ぎ立てる。

カナダ政府も、多年の懸案だったB・C州内の排日問題を解決するには、この機会を逸することは出来ない——と決意したらしいと見られていて、最初の「日本国籍の兵役関係年令の男子」のワクは漸時拡大され、日本国籍たると帰化人ないしはカナダ生れの市民たるとを問わず、男女の別なく遂には全日系人の総立退きとなった。

いよいよ我等一世の出発日三月十六日は来た。この日ロッキー山麓の道路キャンプへ出発する我々一世を送るために、埠頭は家族や二世達で埋められ一大混雑を呈した。別離の辛さは世の運命とは云え、行末を思う時、送る者、送られる者、おのずから涙は頬を濡らし哀愁の感一入なものがあった。

涙など流すものかと家を出で出船のドラに瞳はうるむ　(ウ村出発)

エンジンの始動と共に互に見交す顔も次第にうすれ遠ざかりゆく第二の故郷に対する離愁が

身に沁み渡る。気がつくと船はいつしかボーナイランドを過ぎ灯台を右に見て進んでいる。右舷遥か海上を眺めると、夕霧の中に俄仕立の警備船が三隻遊弋しているのも戦時気分をそそる。

船窓よりはるか瞬くバンクーバーの灯を眺めつつ、底知れぬ不安に沈むうち、船はバンクーバーの埠頭に横付けにされる。下船すると同時に待ちうけた二台のトラックに分乗させられて、ヘステングス公園内の仮収容所に収容され、既に各地より送られた同胞数千人と共に無為の中に五日を過ごす。

三月二十一日

午後七時十五分、C・N・R列車にて、我等一同は、バンクーバーより隔たること五百哩のヤローヘッドの道路キャンプへと向う。

車中では夜の更けるのも知らず、不当な移動に神経を尖らせ、思い思いの意見を吐く者、酒に酔い痴れて歌を唄う者、人をなぐる者等々まるで蜂の巣をつついたような騒ぎだ。不安と不穏の喧騒の中に二昼夜は過ぎ、目的地ヤローヘッドへ着く。

見れば人家一つない高山の麓である。重い柳行李を担ぎ人後に従えば、深雪の中に一連の貨物列車が我等の住家として迎えていた。

初夜は明日の仕事が気になり、眠られぬまま夜は明けた。斧をかついで午前八時より降雪の中を、一歩あやまれば千尋の谷を眼下に、友人等と道路建設の工事にかかる。朝は零下十度と云う。この酷寒は寒さに馴れぬ身には相当こたえ斧を持つ指先が凍ってきかない。切倒したブッシを焚いて暖をとりつつ四方山の話に耽ること屡々である。夕方になるとロッキー颪は噂以上に物凄く、ピューピューと峰から吹きおろす。山の端の月を眺めては、妻子の上に想いを馳せ、身に迫る寒気に夢も凍るばかり。

　一歩あやまれば千尋の谷ロッキーを越ゆる国道日々建設す

　ロッキーの山の麓に斧ふれば低き雲より小雨そぼ降る

前方にそびえ立つ有名なセブンシスターの雄峯を望み澄み切った大気を胸一ぱい吸いつつ斧をふれば、こだまは静寂そのものの高原に響き、荘厳の気がおのずから身に迫るのを覚える。

この頃より無聊をまぎらす為に仕事の余暇を見て再び作歌を始める。

ヤローヘッドで一ケ月働きデコインキャンプへ移動させられた。ここも矢張り貨物列車が我

が家である。此処に来て何より嬉しかったことは、貨車と並行して千古の水を湛えた清流があり、朝夕この流れに沿って散策するのを唯一の楽しみとする。向いにはなだらかな山の草原があり、ムースの群が静かに草を喰みながら遊んでいるさまは宛ら牧場を見るようだ。

陽が西山に没して夕闇迫る頃になると、川下よりビーバーが五、六匹泳いできてわが眼をとらえた。またこの附近には多くの熊、鹿、ムース、エルク、カヨテ等高原特有の動物が数多く棲息していた。聞けばこの地方一帯は有名なジャスパー国立公園の一部に属し禁猟区に指定されているため人間にも馴れているとのこと。

川岸の猫柳が高原の春を魁がけて咲きそめる。その柳のもとで今年始めて聞く蛙の啼き声に暫し耳を傾け、故郷の春を連想することしばし。貨車の窓よりさし込む三日月の光りは、氷山に反射して身を切る思いがする。名峰セブンシスターはまだ夕明りして、ほの赤く夕空に高くそそり立っている景観は誠に素晴らしい。ロッキー山麓でなければ見ることの出来ぬ絶景であろう。折から聞ゆる友の尺八の悲曲は、ひとしお身に沁む。

足柄の金時のごとく奥山に馴れて遊べば熊も寄りくる

黄昏の川の葦間(アシマ)に啼くらしきビーバーの声一つ聞近し

鎌の如き三日月冴ゆる貨車のなか尺八はかなしき曲と聴きゐつ

五月十五日

我々が日々完成を急いでいたテントハウスが愈々出来上り、貨車より蝸牛のそれの如く、又余り重からぬ殻を負って、どろどろと新らしいこのテントハウスに移って来た。奇しき運命とつくづく思う。

生れてはじめて住むテントの中も住めば都、逝く春の高原の自然美を心ゆくまで味わった。ここで特に嬉しかった事は、ウ村を出発して二ケ月ぶりに日本風呂に入浴出来たことである。キャンプへ送られて以来今日初めて給料が支給された。開封して先ず驚いた。七週間働いて四弗七十五仙の給料とは一体どんな勘定であろうかと不審に思い尋ねたところ、妻子の扶助料として毎週二十弗天引して、その残額だそうだ。それにしても七週間にこれだけとは……哀れな事になったものだ。

ロッキー高原には今まで見た事もないさまざまの花が咲き乱れていた。或日友人Kさんと野

原に流れる清流の堤を歩いた。足もとのめずらしい花を一つづつ摘みながら、花の名も友人に尋ねて手帳に記した。それら可憐な花の名も二十六年後の今日、デコインキャンプ生活の思出のよすがとなって、老いかけた僕の胸に何かを暗示して呉れる。

五月から六月にかけて、あの長閑なジャスパー国立公園の逝く春を、僕は全く野の花に熱中して暮した。新緑を透した日の光が洪水のやうに野辺に漲り渡った。僕はその草原に寝ころび、彼の女に遣る手紙を書いた。その中に即吟の短歌も書き添えた。妻はその頃まだウ村に居て、返事の中にふる里の庭に咲いたスイトピー其他可憐な花の押花を送って来た。手紙の終りに返歌の幾首か書いてあったりした。

六月も半ば過ぎると川岸の猫柳も散って、蒲公英は到る所に満開となり、水溜りや川岸から蛙がしきりに啼き立てる。今朝降っていた雨も止んで、六月の空は晴れ渡り、輝く朝日に高原の草木は緑の色を流したように澄み切っている。

此処に約二ケ月余り居て、やがてこのデコインキャンプを離れる日がやって来た。

松風を聞けば磯打つ浪の音に似て懐かしきウ港なるかも
山深く汽車とどまりて吐く煙おもちゃの如き汽笛めづらし

七月二十七日

デコイン道路キャンプが本日閉鎖されて、全員ホープ市へ向け移動を命じられる。これから行く先は妻子の住むゴーストタウンへ行けるのだとお互が決めこんでいたので、誰の顔を見ても今朝は嬉しそうである。

この一帯のキャンプが全部閉鎖され、一連の汽車に乗り込んだのでおびただしい人数である。昼頃ホープ市へ着く。ここに全員下車させられ数時間滞在した。各地へ人員分配のため一人づつ調査をうける。スロカン、グリンウッド、カスロ、サンドン、又ホープ市へとどまる者などそれぞれの家族の居るゴーストタウンへ分配された。その時グリンウッドへ行きたい者が七名居た。僕もその中の一人で調査される時妻子の居るグリンウッドへ行かせてもらう様に願った。然し調査員の回答では、『目下スロカンに多数の人手が必要なので同地へ行って働いてもらいたい』との事であった。

スロカン行きの汽車はその日夕方ホープ市を発つ。途中妻子の住むグリンウッド駅に二分間停車し、五ケ月ぶりに妻といとしいわが子の健康そうな姿を一と目見て安心した。二分間のあわただしいタイムで話も出来ず発車、あとに心を引かれつつスロカンへ送られる。

子を連れて汗いづる真夏の停車場にわれに逢ひに来し妻の細眉

七月三十一日

スロカンに着く。同地に五日間滞在中に或る事情の下に一行十五名と共に、バンクーバー移民館へ護送されることとなった。我等を乗せて居るバンクーバー行の汽車がグリンウッドに一分間停車した。窓外には親子涙にぬれて別れに来ている。僕はこれから移民館へ行き、そこからアングラ捕虜キャンプへ送られるのであろう。

再会の日は何時か、また永久に逢えぬかも知れぬ。繋がれた身には金銭を持つ必要なしと思い、ハンケチに包んで動き出した汽車の窓より妻へほうり投げた。そして母子の振るハンケチの見える迄車窓から手を振った。

黄昏のテントに一人もの思へば憂き身に迫るあらき夕立（スロカンにて）

一条の原に消えゆく沼明り水辺に牛の歩く鈴の音

昼夜はげしい煩悶の連続のために、変りゆく車窓の景色を眺めることもなく、沈思の状態は

バンクーバーまで続いた。マウンテー監視のうちに汽車より降りようとして、始めてカナダ兵を間近くこの眼で見る。彼等の視線に逢い敗者の屈辱が体内に燃える。

移民館の牢獄には既に先入の日本人三十余名が居て私達が入って来た事を心から喜んでくれた。同行の友が増えたからであろう。僕はすぐ皆の青ざめた顔色を見て不安を感じた。然し自分も今日から、これ等の人と共にみじめな、不自由な獄舎生活を余儀なくさせられることを覚悟（カクゴ）した。神経を極度に使ったせいか、軽い頭痛を感ずる、与えられた一枚のブランケットにくるまって、フロワーの上に寝た。この室は三方が部厚い壁に囲まれ、一方の窓より太陽が流れ込むものの、この窓は鉄棒で囲んであり、陰鬱この上もなく、日増しに青ざめてゆく同胞の顔色を見て、その心細さは限りない。

僕等十五名を除いた残りの大多数はガン張り屋で、自発的にこの中へ入って来た人達である。勿論日本必勝を信じているのでこの中の生活を甘んじ、更にアングラインターメントキャンプ行を希望しているようだ。

或日、これ等強硬派の一人が『インターメントキャンプ内は軍隊式で全員坊主刈りだから、我々も今日は一人残らず刈ってしまおう』と云って、テンエージの少年までが強制的に刈られ

てしまった。（こうする事が日本精神の鼓舞だと無理強いの断行であったが）後日アングラへ着いて見ると八百人のうち一人も坊主刈は見当らず、あっけにとられたものである。静かな夕べ、このビルの床下に打ち寄せる波音や、浜千鳥の啼く声が聞えてくる。境遇のせいか果かない悲哀を感ずる。

びちゃびちゃと波寄せて来る床の下窓なき壁に聞かむその音（バンクーバー市移民館）

食料は軍部のさし入れで分量が少い。毎日きまった物で食慾をそそらぬが運動不足だからこれで当り前かも知れない、出来る丈け我々を苦しめ今後の見せしめにする魂胆か不味のものばかりだ。

寝られぬ夜半、きまったようにあのスロカンに於ける出来事が思い起こされる。僕はその時まで世間でよく云う所謂「運命」などというものは、信じようとはしなかった。だがこの事を通して私は、この現実の世界には運命が働いていることを知らしめられるようになった。今は心から打ちとけて話し合える相手とて一人もなく、フロワーの上に横になっていると、さまざまな事が頭の中に蘇って来る。特に開戦以来音信不通になっている祖国の父母兄弟の安否である。然し今の自分にはどうする事も出来ない。一日も早く戦争が終り平和の日の来るのを待つより外はない。

移民館内での二十日間の生活で、我々の唯一の慰めはバンクーバーにまだ残っているガンバリ屋の婦人から度重なる差入れで、戦争と共に生涯忘れる事の出来ぬものの一つであった。あわただしい戦時中にめずらしい美談、この篤志家ミセス川本を今も思いだす。

八月二十八日

アングラインターメントキャンプへの移動命令が下る。午後七時、まだバンクーバーに居残っている婦女子が、アングラ収容所に今送られんとする我等五十名に別れを惜しみ、発車間ぎわに駈けつけて、互に万歳を叫ぶどよめきの中を、C・P列車は静かにプラットホームを離れゆく。

これから行くアングラとは一体如何なる所か？　これは皆の一致した関心事であるに相違ない。僕はつい最近ビートアワ、インターメントキャンプ内にて同胞間の事で発砲事件があった

のを聞いていたし、キャンプ内の雰囲気はほぼ推察していたが。

あまた行けるわが同胞もこの汽笛ききてゆきけむその心想ふ
見送りの万歳高鳴る構内のコスモスの花かそけく揺れ居る

徐々に変りゆく夕闇の町、なつかしい高層ビル、思出つきぬこの町が遠ざかる時、平和が訪れて再びこの町へ帰れる日はいつであろうかと、さまざまな思いが脳裡をかすめた。やがて汽車は急スピードで走る。日本人パイオニヤによって開拓されたフレザーバレー農園地を、感慨無量に通過する頃は、青葉を漏れる農家の灯、田舎の街灯がなつかしくわが目にうるむ。

心身共に疲労していたせいか何時しか一睡していた。目覚むれば明け易い夏の夜は早や東天が白みかけ、車窓を走る雑木林の中から美しい太陽が登る。炎天下のフレザー河の流れ、蒼渺たるロッキーの山々、何という雄大なる大自然の風光であろう。太平洋横断鉄道でカナダを横断する旅人が、誰もが経験するこの素晴らしい景観を、眼前に見せつけられた時、云い知れぬ感動が胸中に躍動するのを覚える。間もなく谷間がやや開けて牧場が現われ、次第に広い牧場となりポツンポツンと民家が散在する。民家を囲む夏草は早や伸び切ってやがて近づく秋を感知する。

愈々カナダの果てしなき太平原が展開された。地平線の彼方に、黙々と浮ぶ積乱雲も美しい。一望千里とはこの景を云うのだと、広漠たる平原に一驚した。実際戦争などどこにあるかと云った有様である。一浮千里平原州は夢心地に過ぐる。ウイヌペーグ市の夜の街灯が雨にうるんで美しい。

雨に濡れし夜汽車の窓にうつりたる平原州の町のともしび

今朝は今までと異った大陸性炎著で、太陽はぎらぎらと原野を照りつけている。汽車は静かな町に停車した。晩夏を誇る草花が、ステーションを囲み、今を盛りと咲き誇っていて、幽かな匂ひが車窓まで漂い淋しい我が旅情を慰める。

八月二十四日

朝から空は晴れ切っていた。次の駅が目的地『アングラ』と聞かされてから、一体どんな所なのか、と車窓より左右を見つつ好奇の目を走らす。やがて汽車はアングラへ着く。

アングラ収容所

ま夏の灼熱した正午の太陽が、まばゆく、今しがた汽車から降りた我々の脊を、真上から強く照りつけた。余りの強さに目まいをしそうである。乾き切った大気、澄み切った紺碧の空、見渡す限り目に入るものは兵営と、その周囲をかこむ原野……すべてがB・C・I州とは全く異った、大陸的特有の風景を映し出している。

我等に数倍の人数の厳(イカ)めしい兵士の銃剣に迎えられた。敵国人であり、これから捕虜キャンプへ入れられんとする私に、たまらない威圧を感ぜしめた。手荷物を両手に疲れた足を引きずりつつ、歩行約三十分にしていかめしい木造のゲートに辿り着く。高さ六メートル余あろう、金網の入口は無気味な音をたてて静かに開かれた。ここを一歩入れば命は向うまかせの籠の鳥になる。

にはとりを雞屋(トヤ)に追込む姿勢にて銃口むけられ獄門くぐる

敵国人のみじめさ転々さすらひの落ちつく果に捕虜キャンプあり

収容所は有刺鉄線で張りめぐらした二重の柵が囲んでいる。いかめしいゲートを入ると、案内者に導かれ、ホールに向う途中、先着の同胞八百名が、背一ぱいに真赤な日の丸のマーク入りのシャツを着ているのに先ず一驚した。同じ運命の下にある者と一緒になれた感じは悪いも

のではない。ホールで真裸にされ検査をうけ金銭や貴重品は軍部で預かった。最後に寝具と衣服とベッドが与えられた。時に太陽は既に西に傾いていた。

配給のキャンパスベード組立てて捕虜キャンプの初夜何故かねむれず

背一はいに日の丸のシャツを着せられて有頂天なりしが射殺の目じるし

アングラへ着いてから二、三日はまだ汽車に乗って、走っている様な錯覚がして気分を統一することさえ出来なかった。

何時しか秋風が身にしみ、紅葉した雑木林の上を雁が飛んでゆく。これまで美しく咲き乱れて居た花や、畑の野菜など霜に打たれて段々枯れてゆき、柵の中がもの淋しさを感ずる様になった。

別れ住む今宵の風は秋の風さやかに月も鉄網(かな)のぼる

空は若く紅葉色づくアングラのパープワヤーに低き秋の山あり

有刺鉄線の下で夕べ啼くうずらの声も憐れである。秋も日に日に深まって、十月の末からアングラはもう平原州特有の木がらしが立ち始めた。朝の霜は兵営の屋根を白くした。

此処に着いてしばらくすると、体が一応落付くと同時に、再び心の戦いが内面から頭をもた

げて来た。これではいけない、一日も早く家族の幸福を何とか積極的に考えなければならない。同時に自分の生への意識が益々強くなって行くばかりである。

逢ふこともなければ冷ゆるわが血あり残照に燃ゆるレールが二本

この中の様子は、僕達あとから来た者には、初めのうちは分らなかったけれど、月日が経つにつれて、八百人の全般的空気を次第に知ることが出来た。この中の事態が決して平穏容易なものでない事を知った。道路キャンプでもそうであったが、収容所内でも寡黙な人格者は控え目にいるが、大勢の中には如何にも偉そうなことを云って、人目を引き人の上に立ちたがる者が居た。此処へ来てから家族より三ヶ月ぶりに便りを受取った。開封した瞬間ほろりと落涙した。ハサミで一字一字チョン切っているために、せっかく妻より三ヶ月ぶりに家族の安否を知らせて来た私にとっては最も重要な書簡だのに、ちんぷんかんぷんで意味が全く通じない。当局でこうまで残酷にしなくともよさそうなものだと腹立たしくてならない。日英両文を解する者が、このキャンプ内でセンサーに当っていると聞いたが、まさか日本人ではあるまいと思う。

センサされし妻よりの手紙あみの目の如く切り捨てられて判読に苦しむ

暁の静寂を破って鳴り渡る喇叭と共に起床、自分のベッドのメークベッドをする。十時よりコマンダーの検閲がある。朝食の喇叭と共に食堂に押し寄せ、列を作って配給の順を待つ。毎日が型にはまったような単調さの連続である。一皿の食物とブレード一枚にお茶。限られた量でいつも腹七分、その上生木を二つにさく如く家族は山河幾千里離れたB・C州に居り、万一の事があっても私は此処から出して貰えない現在の境遇を思う時、不安におそわれて眠れぬ夜を過すこと幾度か知れない。

コケシ人形手に取りて見る司令官厳めしき顔に微笑うかぶる（室内検閲）

トタン屋根に吹きつける夜の凪の音眼覚めて遠き妻と子の顔

朝食が終って屋外へ出ると、全視界が目の前に展ける。アングラの原色の朝焼は素晴らしい。原野の果に昇る旭日は私を狂喜させた。幾度か死に勝る悲しみを実感させながら、私はこの大陸性自然の雄大さに圧倒されて、四方の風光を眼で貪った。不安な日々の前にこうした生の氾濫を見せてくれた運命に感謝した。

今朝は輝く朝日を浴びながら、朝のしじまを破って掛声も勇ましく、青少年のラジオ体操が始まった。老人達は嬉しそうに眺めている。それが終ると再び朝の静けさにかえる。ここに来

て間もなく、梅節氏によって俳句会が創立された。殺風景なキャンプ生活の故か多くの青年が集り句作に余念がない。境遇が反映して主観的なよい句が詠まれた。

秋晴の或日、赤十字社代表のスイス国領事より捕虜交換船で帰国したい向きは申出るようにと発表された。日本必勝を信じていた私は一も二もなく申告した。その頃政府は日系人をカナダ全般に散在政策を強行するため、ゴーストタウン、バンクーバー、ホープ等にまだ居残っている日系に対して、『東部へ移動するか、日本へ引揚げるか、この二つに一つを決めるように』要求した。これに対して多くの日系人は、未知の寒さ厳しい東部へ再移動するより思い切って、なつかしい日本へ帰ろうと、引揚げを申告した者が多数いたようである。

収容所に早や冬が訪れた。この頃は室内で好きな読書に耽るのであるが、時にはストーブを囲んで雑談に耽っている者の仲間入りをする。時には聖書を読むことにした。自分の聖書は青年の頃求めて時々目を通していたが終りまで読んでなかった。今度こそ読み通してやろうと決心した。初めは探求心も手伝ってはげしい勢であったが、終りに近づく頃に少々飽きが来て、同時に不可解な所もあり、再び聖書から遠さかった。その時僕は、キリスト教が、自分でバイブルを読んだだけで理解し得るには余りむずかしいものに思えた。

僕は捕虜キャンプへ入れられてから、生れてこれ迄生きて来た世の中を、何回となくふり返えさせられた。

果して人間は何のために生きているのか、どこに人生の基盤をおいてよいのか、何が人間の世渡りに最高の価値なのか深い懐疑をいだいた。何故かくも窮極のことを真剣に考えさせられたか、要は、日々孤独のどん底に落された生活に呻吟しているからである。そして永遠なものを暗中模索した。その最後を聖書が示している事を確信した。

クリスマスの夕餉の食卓に、ケーキやクッキなどが配布されてある。今晩はめずらしい物があると不審に思いつつ食卓につく。間もなく食前に主任の信岡氏よりくわしい説明がなされた。聞けばこのプレゼントは、グリンウッドとカスロの同胞より贈って下さった事が判明した。キリスト教にまだ疎い僕は、この時特にクリスマスというものを身近に感じた。またこの事に依って、カスロ並にグリンウッドの同胞に心から感謝の念がこみ上げて思わず頬を伝うものを覚えた。主エスキリストにある時、我々はお互に山河幾千里隔てていてなほ一つの兄弟姉妹である実感を得た。

今日は一九四二年十二月二十四日

クリスマスの前夜である。夜になると金網の外の軍隊の建物から賑やかな合唱の声が聞えてくる。何の歌を唄っているか不明だが、戦時中だのに、兵営の方では別天地のような騒ぎだ。鉄柵一つを境界として、不自由な人間と自由な人間の世界の存在することが、妙に対照的にはっきりと意識された。

明くれば降誕祭である。然しこの捕虜キャンプ内は普段と何等変ることなく寂しい終日である。兵営では昨夜にも増して賑やかな歌声が聞えてくる。これが交戦国のクリスマス風景というものなのか、何か僕に思い当るものがある。

それに比べて鉄柵の内では、午後七時以後戸口より一歩も出られない。もし規定を破れば高見櫓の哨兵から注意の暗号が発せられ、それでもきかない時は機関銃で射殺されても仕方がない。収容所を囲む二重の有刺鉄線の所々に一万燭光の電灯が昼を欺くばかりの明るさである。猫の前に置かれた鼠のように、常に機関銃を向けられている不安が潜在意識となり、妙にうっとうしい気がするが、これは僕だけだろうか。クリスマスを終えると、もうすぐ新年である。

一九四三年一月一日

今朝は今までかつて味わった事のない元朝をこのキャンプで迎えるのである。黎明を破って登る初日を、両手を合せて遥に拝んだ。同時に愛する祖国のため、開戦以来音信不通の父母のため無事を祈った。

新鮮な朝の空気を思う存分呼吸し、はてしない青空と紺碧の潮を眺めながら、余りにも変り果てた今の境遇に涙さえ浮んだ。だが流石元朝だ。悲しみのうちに胸中が燃えた。

黎明を破つてとどく初日かげに孤独の胸のあかあかと燃ゆ

勇ましい起床喇叭に起き上り、メークベッドと洗面を終え、食堂へ行かんと一歩戸口を出ると今までにない酷寒である。耳と鼻の先がピリピリと針でさされる様な感じだ。その筈、零下四十度であった。友人の注意で凍傷の難を免かれた。

今日もまた最近のニュースを聞いた。太平洋の戦局はサイパン、テニアン、グアムで激戦が行われ、九月に日本基地パラオが攻撃をうけた。十月になってから米機動部隊と沖縄、台湾、ルソンで戦を交えている。そしてマックアーサ将軍と再度の激戦をフィリッピンのレイテ島にて日本軍は交えている。この時も日本軍は大いなる戦果をあげたと報道された。